
名探偵コナン 短編集

伽藍堂その弐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵コナン 短編集

【Nコード】

N6708J

【作者名】

伽藍堂その式

【あらすじ】

そこそこ量も増えたので、時系列順にまとめてみました。コ哀です。

二人の小学生の年代から死後までをざっくりと書いており、コ哀以外のキャラクター、特に蘭の扱いがかなり酷く、キャラ崩壊が著しいです。コ哀を含めたすべてのキャラクターを愛している方はぜひ読まないようにお願いします。

優し過ぎる間違った選択（前書き）

やっちゃんいました。見切り発車です。

コ哀が大丈夫で、コ哀以外のキャラが不幸になっても大丈夫な方の
みお読みください。

設定は小学生高学年。

優し過ぎる間違った選択

「——もしもし、灰原か？」

「……………。工藤君？」

「おう。元気か？」

「……………ええ、特に健康には問題ないわ」

「そうか、なら良かった」

「……………」

「……………」

「……………。あなたねえ、いったい何のつもりなの？」

四月二十八日、アメリカ時間十九時二十七分、ニューヨーク市街。そのニューヨーク市街にある、何の変哲もない民家の一室で、十代前半の赤がみかかった茶髪をした少女——灰原哀は、掛ってきた電話に出るなりその整った顔を渋くさせた。

「——何が？」

「何が？じゃないわよ。毎週毎週同じような時間帯に用もないのに電話してきて。いったい何なわけ？」

電話の相手は、日本にいる運命共同体にして相棒である江戸川コナンからだった。

今から約二年前、黒の組織事件絡みで自分の正体をバラすというハイリスクを犯してアポトキシン4869の情報を奪取することに成功した哀は、解毒剤の早期開発と、正体がバレたせいで命を本格的に狙われるため、信用のおけるFBIの人間に協力を秘密裏に要

請した。

FBIは迅速に命の安全面を考慮し、尚且つより環境の良い所で研究が続けられるようにと、一年間の準備を終えて灰原をアメリカへ渡米させた。

現在は阿笠博士の知り合いの家に間借りして研究を続けている。

『…………。いや、特に理由はねーんだけど、元気かなあつて』

「何だか釈然としない言い方ね。そんな変な言い回しするくらいならストレートに聞いたらどうなの？」

哀は腰に手を当てると、やや憤然として言った。

彼が電話してくる理由なんて、一つしかない。

一つしかないはずなのだ。

『ストレートに？何をだ？』

「解毒剤の開発よ」

『え？……ああ、うん——そうだな。順調、なのか？』

哀はコナンの返事に苛立ちを覚えた。

と言うのは、しつこく聞くのはしのびないと思つての口調というか、たいして関心がないというか、彼の解毒剤に対する心意がよくわからないからだ。

昔は解毒剤はまだかまだかと顔を合わせば言ってきたのにも関わらず、最近はこちらがわざわざ振らないと話題にならない。しかもなつたとしても微妙に話を逸らそうとさえする。

——何だつて言うのよ、本当に。

「どうかしらね」

実際のところ、解毒剤の開発は九割方終わっている。

だが、それを素直に言うつもりが毛頭ない哀は、いつもはぐらかすようなことを言つて、コナンの反応を確かめている。

『ふーん、そつか。あんまり無理するなよ』

昔なら小言や嫌味の一つや二つ、あるいはもう少し突っ込んだ問い詰め方をしてくてもおかしくないのに、今は随分と素気ない。

そつ、実に素気ないのだ。

——何でこんなに関心が薄いのよ……！？

解毒剤の進展を聞きに電話してきているはずなのに、関心が薄すぎるコナンに、哀はどうにも落ち着かない気持ちになってしまう。

最初これに気づいた時は、彼なりの強がりかとも思ったのだから、感情を偽っているような不自然さがなく、そこがまた、哀の心情を？き乱した。

「——あなた、戻る気ないの？」

と、何度問いただしかけたことか…。

実際に問いただしてもよかったのだから、それに対するコナンの返事がどう返っているのかが怖くて未だ聞けずにいる。

「——はあ」

思わず溜息が出た。

『……何だよ、溜息なんかついて。あ、この電話、もしかして邪魔しちゃってるのか？』

哀の溜息を聞き取ったコナンが、気遣わしげに言ってきた。

「そんなんじゃないわよ。というか、あなた、学校はどうしたのよ？日本は確か、午前九時半頃でしょう？平日だし、授業真ただ中なんじゃないの？」

『バー口、こっちは二十九日、昭和の日で学校はお休みなんだよ』

「あらそう。いい御身分ね。こっちは誰かさんのために必死に研究してるっていうのに」

『へいへい、灰原さんには感謝してますよー』

「ム力つくわねえ、その言い草」

『何だとお、俺の最上級の感謝の言葉を』

「全く、全然、これっぽっちも響かないわよ、あなたの感謝」

『ああ、そうかよ』

わざと拗ねたような口調で返すコナンの声を聞いて、哀は受話器を持ったまま笑いを堪えて肩を揺すった。

解毒剤の会話が少なくなった変わりに、こういったやりとりが多くなった。

それが良いことなのかどうかは哀には分からなかったが、少なくとも嬉しくはあった。

何せもともとコナンは、哀のアメリカ行きには反対していて、大喧嘩までしたのだ。

喧嘩したその足で哀はアメリカに行ったので、コナンとの和解はほとんど諦めかけていたのだが、半年ほど前からひょっこり電話してきて、まるで喧嘩なんかしていなかったかのように話すコナンに呆れた記憶がある。

結局、彼が何で反対していたのか、その理由は分からないままだが、ぎくしゃくしているよりは断然いいと哀は思っている。

『あ。お前、笑ってんだろ？』

「——あら、そんなことはないわよ」

それでも、こういった電話は正直控えてほしいと哀は内心思っていたりする。

——じゃないと私、期待しちゃうじゃない。

今日も哀は、自分の内側から溢れる許されない感情を必死に押し殺しながら、コナンとの電話を表面上はツンと澄まして、その内側では嬉々としながら楽しんだのだった。

一年後。

——小学六年生になったたはいいが、やることは特に変わりはないな。

四月二十七日、午後十六時三十分。

帝丹小学校六年二組の教室で、黒ぶち眼鏡に端正な顔立ち少年、江戸川コナンは窓際が一番後ろの席で、大きな欠伸を噛み殺しながら体を伸ばした。

現在、夕日が差し込む教室には彼しかおらず、がらんとした教室は、昼間の騒々しさとのギャップも相まって、実に侘しいものとなっている。

黒板には六限目の——コナンにとっては解り切った国語の内容がまだ消されずに色濃く残ってる。

本当にやることに大した変りはない。

四月の頭に学年が一個上がっただけで、相変わらず解り切ったつまらない授業、退屈な行事。

だがしかし、それももう終わる。

そう、アメリカに行っていた灰原哀が帰ってくるのだ。

しかも一時的なものではなく、そのまま日本に残るそうなのだ。

つまり、またこの学校で——出来ればこの同じ教室と一緒に——。

「……………」

コナンは口元を緩めながら教室を眺めていたが、すぐに真顔に戻った。

哀に直接聞いてはいないので確信はないが、彼女がなぜ帰ってくる気になったかは大よそ察しがついていた。

そう、解毒剤が完成したのだ。

「…………」。飲めば、俺は工藤新一に戻る」

口に出して、その事実を改めて確認する。

確認するコナンの表情に歓喜の色はない。

「……俺は……蘭……やっぱり……俺は」

そう呟いて学ランの内ポケットに入っている携帯電話を取り出した時、低いバイブレーションとともに、携帯電話が着信を知らせてきた。「光彦か」

携帯の画面には、同級生で幼馴染の円谷光彦が表示されていた。

着信相手を確認したコナンは、通話ボタンを押した。

「光彦？」

『あ、コナン君ですか？今どこです？』

「学校」

『……ちよつと、何でまだ学校にいるんですか！？』

「寝過したんだよ」

普段よりもボリュームが倍大きい光彦の声に、携帯電話から思わず耳を遠のけながら、コナンは素気なく、五限目から居眠りしていて気付いたらホームルームまで終わっていたという現状を報告した。

『相変わらずですね。そんなだから先生たちから隠れ不良なんて言われるんですよ』

「ほつとけ」

最近小言が非常に多い光彦に呆れられて、コナンは電話口で苦笑した。

「で、何の用だよ？」

『いや、ほら、コナン君もうすぐ誕生日じゃないですか』

「……………」

『コナン君？』

「——ああ、そういえばそうだな」

すっかり忘れていて、しかも思い出してもどこか他人事のような口調に、光彦はなおも呆れて、

『毎年毎年よくもまあ忘れられますねえ、自分の誕生日なのに』

「しょうがねーだろ。あんまり興味ねーんだから」

コナンは頭を掻きながらぞんざいに言った。

「で、それがどうしたんだよ？」

『ええ、ほら、灰原さんが帰ってくるのってゴールデンウィーク明けじゃないですか』

「そうだな」

『だから、元太君が灰原さんのお帰り会と一緒に祝っちゃおうって言うてきまして』

「……別に俺のことは気に遣わなくていいのに」

『いえ、歩美ちゃんと元太君はそのつもりで下準備始めちゃってるんでもう遅いです』

「ははは。事後承諾かよ」

この世界の中で、一番完璧な年齢詐称が出来ているコナンにとって、誕生日という概念はつらいだけなのだが、毎年彼らはしっかりと祝ってくれる。

毎年やんわり断っているのだが、祝ってくれること自体はそれはそれで嬉しいのも確かなので、あまり食い下がったりはしない。

今回も押し切る形になったようで、コナンは苦笑が本当に絶えない。

『ええ、そういうことです。じゃあ、僕これから塾なんで、何かあったら携帯に連絡ください』

「ああ、わかった」

コナンは二つ返事で電話を切ると、そのまま携帯電話の電話帳を開いた。

——言わないといけないよな、蘭。

そんなことを思いながら、右手で携帯電話をいじり、左手で学ランのポケットをあちこちまさぐり、蝶ネクタイ型変声器を取り出す。

——大丈夫、落ち着け俺。

手慣れているはずの変声器の操作を何度もしくじりながら、コナンは深呼吸する。

——きつと、この選択は間違っているんだろう。

「でも、それでも俺は——」

変声器の設定は——工藤新一。
電話をかける相手は——毛利蘭。

携帯電話を握る手に力が入り、全身に緊張が走る。

呼び出しを聞きながら、「これでいいんだ、これでいいんだ」と呪文のように呟く。

コナンにとって、長い長い呼び出し音が終わり——、

「——新一……なの？」

江戸川コナンは覚悟を決めた。

五月六日、午後三時二十八分。

帰国にしては随分と少ない荷物で空港を出た灰原哀を待っていたの

は、

「おかえりなさい！アイちゃん！」

「久しぶりだな、灰原」

「灰原さん。お久しぶりです」

という、彼女を迎えに来ていた連中の熱烈な歓迎と、

「アメリカはどうだった!？」

「なあなあ、向こうのハンバーガーがデカイってホントか!？」

「元太君、二年越しに会ったっていうのに、何です、その質問は。

お帰りなさい、灰原さん、疲れてませんか？良ければ僕、荷物持ちますよ」

という、彼女を迎えに来て連中の質問の嵐だった。

彼女を迎えに来た連中——吉田歩美、小嶋元太、円谷光彦の二年越しにも関わらず、全く変わらない接し方に、哀は嬉しそうに微笑んで、

「あなた達も元気そうだなによりだわ」と答えた。

そして、そのまま視線は来ているはずのもう一人を探し始め——自分たちの二歩ほど後ろで歩美たちのはしゃぎように困ったような笑顔を浮かべている阿笠博士を見つけ、

「お帰り、灰原」

少し遅れてやって来た、黒ぶち眼鏡の少年、江戸川コナンを見つけた。

「うん」

お帰りと言ってきたコナンの表情があまりにも優しくかったせいで、哀は心臓が跳ね上がってしまい、頷くのが精一杯になってしまった。
——なんて顔するのよ。

コナン相手にここまで動揺する自分が許せなくて、哀はほんのりと頬を染めたまま、半目でコナンを睨みつけた。

当のコナンは、何故哀がこんなに可愛く睨んでくるのかさっぱり分からず首を傾げ、哀の機嫌をさらに悪くしたのは言うまでもない。

五月六日、午後九時。

哀のお帰り＆コナンのバースデイパーティが終わり、少年探偵団のメンツが名残惜しそうに帰って、先ほどとはうって変わって静かな阿笠邸。

箒と塵取りを持った灰原哀は困ったように笑った。

片付けまでさせてくれと言ってきた少年探偵団の面々を、親御さんが心配するからと帰らせたコナンは、キッチンで大量に出た洗い物で泡まみれになりながら格闘していた。

一方、同じように少年探偵団に片付けはいいから帰りなさいと言った阿笠博士は、リビングでテーブルに散らかっている空のスナック袋や空のペットボトルをせっせとゴミ袋に入れていた。

——空港を出た後、阿笠邸まで一直線に帰った哀達は、そのまま阿笠邸で豪華な夕食をとり、ゲームをしたり、ただ騒いだり、おしゃべりに興じたりした。

そうやって楽しみながら、哀は子供の二年間の成長の早さに舌を巻いた。

皆、根本的な人柄こそ変わってはいなかったが、発言や物腰、考え方に随分と磨きが勝った光彦。活発で明るく、甘え上手になった歩美。体格と同じくらいに大らかさが増した元太。

まあ、中には人格形成が既に出来ているせいか、外見しか成長していない人もいるが。

——例えば工藤君とか、工藤君とか、工藤君とか。

「灰原。終わったんならこっち手伝ってくんないか？」

哀が箒の手を止めて、感慨にふけっているのを、掃除が終わったと

勘違いしたコナンが声をかけた。

「あ、ごめんなさい。まだ終わっていないの」

「ん、そうなのか？じゃあ、終わってからでいいぜ」

——訂正。やっぱりコナンも少し変わった気がする。

二年前なら「なんだよ、さぼってないで手え動かせよ」とか「さつさと終わらせてこつち手伝ってくれ」とか言いそうなものなのに、今は口調の端々に妙な優しさを感じる。

空港で会ったときからちよくちよく感じていたその感覚を今また再び感じとって、哀は半眼でコナンを見つめ——もとい、凝視した。
「…………。な、何だよ？」

哀に不躰な視線で見られ、コナンは困惑しているようだった。

「こつちが聞きたいんだけどね。——何なのよって」

「……はあ？」

訳がわからんと言いたげなコナンの表情を見て、哀は心の中で小さく嘆息した。

二人がそんなおかしなやり取りをしている中、阿笠は一通り片付けを終えると、

「新一。悪いが後頼む。ワシは疲れた」

「ああ、いいぜ。今日はありがとな」

コナンが快諾したのを聞いて、阿笠は頷いた。

「うむ、じゃあ、新一、皆のお前へのプレゼントはお前の部屋に置いておくからな」

「お、サンキュー」

阿笠は再び頷き、歩美達がコナンにくれたプレゼントを抱え、哀に「おやすみ」と言って二階に上がっていった。

哀は「おやすみなさい」と声をかけ——、

「——え？…………え、『お前の部屋』？」

阿笠の何気ない一言に引つ掛かりを——それはもうちょっと信じられないような引つかかりを感じたのだった。

「ちょ、ちよつと工藤君」

相変わらず洗い物と格闘しているコナンに哀は慌てて詰め寄った。

「何だ？ 疲れたんだったら先に寝てていいぞ。お前の部屋、いつ帰ってきてもいいようにちゃんと掃除して空けといてやったから」

「あらそうなの？ ありがとう——じゃなくって！」

コナンの惚けた様な発言に、思わずノリ突っ込みをしてしまった哀だったが、今重要なのはそこではなく、

「あなたの部屋！ 今、阿笠博士、あなたの部屋にプレゼント持っていくって言うて二階に上がったんだけどっ」

「あ！ ワリイ。言うの忘れてた。俺、今ここに住んでんだ」
「——！！」

哀はこのコナンの台詞に、文字通り絶句した。

「あー、まあ、その、とりあえずさ、順を追って事情は話すから、ちよつと待ってくんないか？ これ、カタしたいからさ」

コナンが洗い物を指さすのを見て、哀はとりあえず感情を再起動させると、

「丁度いいわ。私もあなたに話したいことがあるし」

哀の返事を聞いて、コナンは満足そうに頷くと、止まっていた手を動かして洗い物を再開した。

その間、哀はコーヒーを淹れながら、彼の作業が終わるのを待った。

五月六日、午後九時十七分。

「で？ どっちから話すの？」

阿笠が綺麗に片付けたテーブルには二つコーヒーの入ったカップが置かれ、洗い物を終えたコナンと、やや緊張気味の哀はソファの両端に座ってゆつくりとコーヒーを啜っていた。

「お前からいいよ。俺の事情の話は多分、お前の今からする話と関わっているだろうから」

「…………。そう」

コナンの口ぶりから、今から哀が何の話をするのか、見当が付いているようだった。

ただ、その話が彼の言っていた事情とどう結びつくのはよくわからないが。

哀は温くなり始めたコーヒーを一口飲むと、おもむろに口を開いた。

「工藤君」

「…………。おう」

「——はい、誕生日プレゼント」

「……………」

「……………」

「…………。はい？」

哀に可愛い柄の小さなポチ袋を差し出され、目が点になるコナン。

そのコナンの表情が可笑しくて、哀は我慢できずにクスクスと笑った。

「あーてめ、からかいやがったなあ！」

からかわれたことに憤然としながらどこか楽しそうなコナンに、哀は笑いを引っ込めた。

「——ごめんなさい。さっきのは冗談だったけど、その袋の中には確かにあなたにとってのプレゼントが入っているわ」

哀の言葉にコナンははっとすると、袋を開けた。

——中から出てきたのは、一粒のカプセル。

「解毒剤…………。だな」

「そうよ。それであなた100%元に戻るわ」

「…………。そうか。本当に完成したんだな…………。解毒剤」

「…………。飲まないの？」

さっきほどから満足げではあるが、手のひらでカプセルを弄ぶばかりで、一向に飲む気配がないコナンに、哀は怪訝な顔をした。

「…………その前に、俺の事情を聞いてもらってもいいか？」

「…………。別に……構わないけど」
どうにも釈然としない哀を余所に、コナンは至極真面目な顔で言った。

「まあ、その、結論から言えば、俺は工藤新一をやめることにした」

——え？

一瞬、哀の思考が停止した。

「工藤新一を……やめる？」

眩暈がした。

「やめる」

「う、嘘でしょ？」

「いいや、だからゴールデンウィーク中にこっちに住居移したんだ。もう蘭の所には居れないから」

「——ホントに？」

「——ああ」

ナニヲ、イツテイルノ？

浮かんだのは、それは間違っているという強い感情と、ほんの一瞬の期待。

だが、そのほんの一瞬の期待を振り払うべく哀は口を開いた。

「違う……違うわよ。だってそんな訳ないじゃない。あなた、何のために今までやってきたのよ！？私は何のためにアメリカに行ったのよ！？あなたのためでしょ！あなたが戻るためでしょ！？それを何よ！解毒剤だって出来たのに今更！」

「分かってる」

「分かってないわよ！」

ショッキングなことを言われ、感情が高ぶってしまった哀は、コナンに怒鳴り散らした。

悲痛に顔を歪ませて俯いているコナンに、哀はさらにたたみかける。

「蘭さんはどうするのよ？何年も何年も待たせてるんでしょ！あなた、分かってる？その蘭さんを裏切ろうとしているのよ！」

「――裏切りって言うなら、もうずっと前から……だろ？自分の正体偽って、事件だから会えないって誤魔化して、相談もしないでひたすら嘘ばかりつき続けてさ」

今更なコナンの台詞に、哀の表情が一層険しくなった。

「しょうがないじゃない！蘭さんを守るにはそうするしかなかったんでしょ！」

「ああ……ああ、そうだよ！！でも結果はどうだよ！？もう俺は蘭にたいして、罪悪感しか感じるようになってんだよ！今戻ったって、お互いが不幸になるだけなんだ！」

顔を上げて怒鳴り返してきたコナンを見て、哀は完全に頭に血がのぼった。

「ふざけないで！あなたが罪悪感に耐えられないだけでしょ！？あなたのそれはただの『逃避』じゃない！」

「うるせえ！もう『工藤新一』には居場所がねーんだよ！俺には『江戸川コナン』の居場所しか……それに俺は――」

コナンは途中まで言いかけて口ごもると、また俯いた。

「……………」。「それに俺は――」。「何よ？」

哀はピクリと片眉を動かすと、コナンに先を促した。

コナンは哀の意地悪な質問に、引きつった笑みを浮かべると、
「悪い。こんな時に言うことじゃなかった」

頭を乱暴に掻きながら謝罪した。

すっかりしよげてしまったコナンに、哀は小さく息をつくとき、ソファの背もたれに身を預けた。

何だがとても馬鹿らしくなった。

コナンもそう思ったようで、不貞腐れたように頬杖をついている。
ある意味、自然の成り行きかもしれない。

これだけ黒の組織との戦いが長引くとは二人とも思っていなかった。

たわけで。

時間とともに状況も環境もすっかり変わってしまった。
そして、気持ちも。

とりあえず、言いたいことは大方言ったので、二人ともどこか憑きものがとれたような顔をしていた。

——先に沈黙を破ったのは、哀だった。

「……何で喧嘩してるのかしら？ 私達」

問いかけと言うより、呟きに近かったが、コナンはちゃんと拾っていた。

「まったくだ、不毛すぎる」

「……内容は違うけど、二年前の喧嘩みたいだったわ」

「……。そう言えば二年前にも喧嘩したっけ？」

「ええ。フフ、あなたが私にアメリカに行ってほしくないって赤ちやんみたいに駄々をこねてたわね」

「うつさい。行ってほしくなかったからそう言ったまでだ」

「……。ねえ、あの時はあえて聞かなかったんだけど、あなた、何であんなに反対したわけ？」

哀の質問に、コナンは痛いところをつかれたような、渋い顔をして、
「お前……実は分かってんだろ」
と悔しそうに睨んだ。

「正直——ちょっと期待してるわ」

コナンの悔しそうな視線から目を逸らしながら、哀はすっかり冷めてしまったコーヒーの残りを口にした。

頬が薄ら紅いのが、この薄暗いリビングの中でもよく分かった。

哀にしては随分と素直な態度に、コナンは思わず噴き出した。

「期待——なるほどね」

哀は、笑いを堪えているコナンを呆れ七、照れ三の割合で睨んだ。

「それで？ 探偵さんは私の期待には応えてくれるのかしら？」

「そう言うお前は俺の気持ちにんて応えてくれんのか？」

挑発的な言葉を言い合いながらも表情は真剣で。

二人はゆっくりとソファの上で向き合った。

——工藤君……ううん、江戸川君。あなた、本当に戻らなくてもいいのね？

——ああ。

——後悔しても知らないんだから。

——後悔なら慣れてる。

——強がり言っちゃって。

——そんなんじゃないよ。

——フフ、じゃあ、そういうことにしておいてあげる。

——偉そうに。

——江戸川君。

——……ん？

「大好き」

「——俺も」

四月二十七日、午後十六時三十分。

「新一…なの？」

「ああ、俺だ」

「どうしたの？いつもはこの時間にかけてこないのに」

「まあ、な。ところで蘭。これから俺が言うことに驚かないでほしいんだが——」

「うん？何よ？」

「俺は、もう帰らない」

優し過ぎる間違った選択（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。

宮沢礼二郎と桐山景（前書き）

設定 中学生時代。

宮沢礼二郎と桐山景

十二月二十五日。クリスマス。

灰色がかった空の下、米花町はクリスマス一色に染まり、浮足立った若者が、デートや遊びに耽っていた。

そんな中、

「宮沢くん、ただいまあ」

米花町の北端に位置する、廃れた町並みの雑居ビル。その最上階に小さな事務所を構える宮沢探偵事務所。そこへ二十歳前後の女性が大量の荷物を抱え、覇氣の感じない声で事務所の主に声をかけた。

「ああ、おかえり。大変だったでしょ？」

窓際を背にしたデスクで、何やら気難しい書類を読んでいた事務所の主、宮沢礼二郎は、大量の荷物を抱えた女性、桐山景に笑顔で答えた。

「ホント大変だったわ。……つーか何が悲しくてクリスマスに浮気調査なんかしきゃなんないかな、まったく」

そう言いながら、ぞんざいに荷物——張り込み用の道具をソファに放り出すと、手に持っていたB4の封筒を差し出し、

「はいこれ、調査内容」

「はい、確かに受け取りました。お疲れ様です」

礼二郎は景から封筒を受け取ると、そのまま見もせずに出しにしまった。

「見ないの？」

「君のことだ。万事うまくいったんでしょ？ なら後でもいいだろう」
礼二郎はそう言って読んでいた書類をデスクに置くと、

「あ、そうだ。ケーキ買ってあるけど、食べる？」

「お。気が利くじゃない」

「クリスマスまでかりだしたお詫びだよ」

「珍しい。夏のお盆の時は何も出なかったのに」

「あのときの反省を踏まえてみた」

「いい心がけです。宮沢君」

「おだてても何も出ないよ。桐山君はショートケーキとチーズケーキどっちがいい？」

「ショート！ショートケーキで！」

談笑をしながら礼二郎はケーキをお皿に移し、景は紅茶の入ったポットをカップに注いでいる。

それぞれの準備ができると、二人は来客用の椅子に腰掛け、テーブルをはさんで向かい合ってケーキをつついた。

「……そう言えば、さつきは何読んでたの？」

ケーキを半分ほど食べたところで、景は紅茶をすすっている礼二郎に訊ねた。

「ああ、あれね。一年前に起きた、通称『黒の組織』事件の資料さ」

「うえ……またクリスマスなのにようもない事件漁ってるわね」

「まあ、確かにしようもないけどね」

礼二郎は紅茶のカップを置くと、フォークでチーズケーキを半分に切る。

「確か、椎名薬品センターの爆破事件で存在が露出したんだっけ」

「よく知ってるね」

「そりゃ、宮沢君の助手ですからね。それくらいは」

誇らしげに無い胸を張る景に、礼二郎は優しい笑顔を振りまきながら、

「ならちよつと話は変わるけど、桐山君は大人が子供に戻るなんて話を信じるかい？」

と、突拍子もないことを訊いてきた。

「……はい？」

景は、質問の意図が分からず、フォークを口にくわえたまま首を傾げた。

「桐山君は十九歳だったよね？つまり、君は十九歳から七歳まで若返る」

「あり得ないでしょ」

景はさも当然のように言い切った。あり得るはずがないと。

「そうだね。あり得ないと僕も思ってた」

礼二郎の口振りに、景は眉を寄せた。

「思ってた？じゃあ、今はあり得るって言うの？」

「うん。まあね」

平素のまま肯定する礼二郎を、不思議なものでも見るかのごとく見つめていた景は、ぬるくなり始めた紅茶を一気に飲み干した。

「あのさ、話が見えないんだけど」

「ああ、ごめんごめん。そうだね。説明するね。さっき話に出た机の資料、あれ依頼なんだよ」

「依頼？」

道理であんなしょうもない事件を調べているわけだ。

「君が浮気調査で張り込んでいる間にね、毛利小五郎さんの娘さんが来たんだ」

「も、毛利小五郎って、あの名探偵の？」

「そう。その娘さんがね、この二人について調べて欲しいって言うてきてね」

礼二郎は、黒のジャケットの内ポケットから二枚の写真を取り出した。

「誰これ？」

その二枚の写真には、中学生くらいの少年と少女が写っていた。

少年の方は黒縁眼鏡をかけ、生意気で小憎たらしい表情をしている。

二枚目の少女は、赤の強い茶髪に涼しげな目元。恐ろしく容姿端麗なその顔は、どこか冷たい。

「少年は江戸川コナン。少女は灰原哀」

「な、何なの？それ本名？いかにも偽名ですって感じの名前なんだけど」

明らかに推理小説から取りました的な名前である。

景がそう捲くし立てると、礼二郎はうんうんと頷いた。

「うん、全くその通りだ。で、その依頼主の毛利蘭さんは、この二人が何者か調べて欲しいと言ってきたわけ」

「……。自分の父親が名探偵なのに、何でうちに頼むのよ？」

「身近にいる人間が問い詰めたところで、いつも煙に巻かれるんだって。だからうちに頼ってきた」

「ふーん……って、ちょっと待ってよ。大げさじゃないの？ たかが中学生だよ？ そもそも正体って何よ？ 中身がエイリアンとか？」

「……違つよ」

景は毛利蘭の行動がさっぱりわからない。中学そこらの年齢で、探偵を雇わなければならないほどの秘密保持をしているとは到底思えないからだ。

「僕も桐山君が思っていることは一通り訊いてみたんだけど」

「で？ 何て答えたの？」

景は、ケーキの上に乗っているイチゴを口に放り込みながら聞いた。
「江戸川コナンは、自分の初恋の相手だった工藤新一なのではないのか？ と疑っている。だとさ」

「何それ」

「うん、ここで最初の話に繋がるんだけど……つまりね、当時毛利さんの幼馴染で高校生の工藤新一は、何らかの事件に関わったせいで身体を小さくされた……。それに灰原哀が絡んでいるのではないかと本気で疑っているんだよ」

「……はあ？」

景はイチゴを乱暴に咀嚼しながら、大いに呆れた。

「何、その荒唐無稽な話。宮沢君、それさあ、からかわれただけなんじゃないの？」

「それが、どうもそうじゃないんだよ」

「何の冗談ですか？それは」

「冗談では……ありません」

十二月十五日。

事務所の一階にある喫茶店で、今回の依頼主の話を聞いた礼二郎は、疑わしそくに目を細めながら、体面に座るロングヘアの女性を見やった。

毛利蘭。年は二十歳過ぎといったところか？整った容姿に、何かスポーツをやっているのか、引き締まっているボディライン。白のセーターのせいで、そのラインが一層際立っている。

世間では有名な探偵、眠りの小五郎こと毛利小五郎の一人娘であり、現在は近所の大学に通っている。

蘭は俯いたまま顔を上げない。

「……まあ、何にせよ、もう少し詳しくお話願いませんか？一介の中学生が実はあなたと同じ年なんですと言われても、なんのこつちやって感じなんです」

話が進まないの、じれったくなった礼二郎がそう促すと、「それもそうです」と蘭は覇気がないまま答えた。

「——コナン君とは、七年前に新一がいなくなつてすぐの頃に知り合つて、ちょっとした縁で彼が私の家に居候することになったんです。それで、ずっと面倒を見てたんですけど、何て言うか、あんまり子供っぽくなんですよ、彼。普段はいかにも子供がしそな表情とか取ったりするんですけど、事件とかに巻き込まれたときとか、

大人顔負けの行動や発言をするし。何より時々見せる仕草や癖が新一にそっくりで……うつん。むしろ彼は新一自身なんじゃないかなって思うんです。どういう理由か、どうやったらそんなことになるか全く分らないけど……でも、私の感覚が『彼は新一だ』って言うって聞かないんです！あんなに……あんなに待ったのに！死んでも帰ってくるって、言った癖に！あいつは今もコナンのままのうのと暮らしてる！私が泣きながら待っていたのを、ずっと側でいて笑っていたんだ！殺してやる！私の心を弄んでっ！絶対殺してやる！！」
淡々と話していた蘭は、話が進むにつれて徐々に口調が荒くなっていた。

俯き加減の瞳は焦点が会っておらず、淀んで濁っていた。

——これは……相当憎んでるな。

呆氣にとられている礼二郎に気付いた蘭は、

「……ご、ごめんなさい。取り乱しました」

「……あ……いえ」

何事もなかったかのように平素に戻った蘭に、礼二郎は引きつったような笑いを見せた。

「別に、恨んでいるとか、憎んでいるわけじゃないんです」

「そ、そうですか」

「はい。私があなたに頼みたいのは、江戸川コナンが工藤新一であるという証拠と、灰原哀がそれに絡んでるのは間違いないので、その証拠も」

そう言って、毛利蘭は二枚の写真と、写真の二人が通っている学校名や住所の載った書類を手渡した。

「嘘臭い話ね」

景は、紅茶のおかわりをカップに注ぎながら、端的な感想を述べた。

「まあ、そう言われると身も蓋もないね」

「だいたいあり得ないって。若返るなんて」

「まあね」

「で？引き受けたわけね。その胡散臭い依頼」

「うん。前金が五十万だったし」

「うつそ、前金で五十？！」

「うん、成功したらその三倍を払うって言うからね。ちょっと面倒くさいけど割がいいから」

「相変わらず金の亡者ねえ。それで？十日経っているわけだけど、何か進展はあったわけ？」

「うん。調査はもう終わっているからね」

「そうなんだ」

「で、結論から言えば――」

「うん」

「江戸川コナンは、間違いなく工藤新一だ」

につこりとほほ笑みながら断言した礼二郎を前に、一緒に注いであげた紅茶のおかわりを置きながら、景は案外冷静に、

「あり得るってわけ？そんな嘘臭い話が」

と半眼になって言った。

「あり得たんだよ、それが。いやああ、骨の折れる調査だったよ。」

警察にパイプ持つてるコネを大方使い切ったし、前金の五十万じゃ調査費全然足りないし」

快活に笑いながらとんでもないことを言う礼二郎に、景は焦りながら、

「待ってよ！あたしの給料大丈夫でしょうね！？」

「……まあまあ、落ち着いて」

切羽詰った様子で礼二郎に詰め寄る景に、

「大丈夫だよ。……はい、今月の給料明細書」

「お！ありがとー！」

景は嬉々として明細書を受け取った。

「安心したかい？それじゃ、話を戻すね」

礼二郎は、明細書に頼ずりしている景を可笑しそうに見ながら言った。

「うん」

景は微妙にうわの空だったが、礼二郎はいつものことだと割り切った様子で話を再開した。

「この、一見あり得ない話は、調べれば調べるほどに奇妙な事実が浮上してね。さっきデスクで読んでた『黒の組織』事件なんかそのひとつさ」

「あの巨大組織と江戸川君達は、関わりがあるってこと？」

「そうなんだ。まあ、さっき読んでいた資料は記憶違いがないかの確認って程度で読んでただけだね」

景は納得したように頷きながら、先を促した。

「毛利さんは、彼が行方をくらましたのは、トロピカルランドでデートをしていた時と言っていた。そのとき彼らはジェットコースターで殺人事件に遭遇している。コースターに乗っていた乗客に黒の組織の連中も乗り合わせていることが分かっているから、恐らく高校生であつた江戸川君こと工藤君はそのあと、身分不相応な——つまり、警察に任せるなりしておけば良かった何らかの事件に、首を突っ込んだために面倒な何かに巻き込まれ、連中に薬を飲まされたのではないかと僕は思う」

「薬？」

「うん、アポトキシン4869って言う薬。連中が研究していた薬品名だ。この薬は、その名前通り人間の身体に細胞の自己破壊を促す薬だ。黒の連中は、江戸川君を殺すつもりで飲ませたのだろうけど、薬の作用は七歳時の大きさまでで留まり、あろうことが偶発的な作用で、残った部分の細胞が著しく若返った」

「うわぁ……」

あまりにもすっ飛んだ話で、景はこれと言った言葉が浮かばない。

「突拍子もない話だろ？僕は何か得体の知れない異世界に足を突っ込んだようでぞっとしたよ」

確かにそうだろう。近代社会において、大人が子供に若返るなんてことは、非現実的でナンセンスだ。

「っていうか……たかだか十日でよくまあ、そこまで調べたわね」景は感嘆した。

大人が子供になると言う、ただでさえ意味不明な実体を、十日そこからここまで調べてしまったのだ。

「それは多分、この件はもう、黒の組織が崩壊した時点でただの過去になったのさ。黒の組織は秘匿性が極端だったが、崩壊してから一年になる。だからいろいろと口も緩んでくるのさ」

礼二郎の得意げな顔を特に指摘するわけでもなく、景は、

「なら、さっきから話が出てこない灰原哀は、江戸川君とどういう関係なの？」

と訊ねた。

礼二郎は、景に注いでもらった紅茶を美味しそうにすすると、にっこりと笑って言った。

「もちろん調べはついてるよ。灰原哀——本名、宮野志保。黒の組織の研究者であり、アポトキシン4869の開発者でもある」

「うっそ……それホントなの？」

本当ならなかなかややこしい事になる。江戸川は自分を小さくした原因を作った女と一緒に行動しているということになるからだ。

「ホント。姉を組織に殺されて、組織を裏切った灰原さんは、監禁された際、死ぬつもりで飲んだアポトキシン4869の作用により幼児化して、その小さい体を利用して逃げたらしいね。その後、頼る当てがなかった彼女は、必然的に同じ幼児化の境遇にある江戸川君を頼る他なかった……ようだね」

何だかドラマの一シーンのような話だ。

「——彼女のことを知った江戸川君はそうとう責めたみたいだけど

……」

そりやそうだろう。体を小さくされて、親しかった間柄の人間にすら身分を偽らなければならなくなり、かつ、命を狙われる――。

そんな生活を余儀なくされたのだ。責めて当然だろう。

景はそう思ったが、礼二郎は渋い顔をして先を続けた。

「――どうかと思うんだよね。まあ、江戸川君も気づいて反省はしてんだろうけど、小さくなったのは江戸川君の好奇心のせいなんだよ。いくら頭がよくても所詮は一介の高校生。素人なんだから何でもかんでも首突っ込んでちゃ危ない目にも遭うでしょうに。……彼は自意識過剰としようもない好奇心と青臭い正義感のせいで小さくなったのさ。その辺を棚に上げて彼女を責めるのはいかなもんかなあ」

「でも……でも彼女が薬を作らなきゃ彼は小さくならなかったわけじゃない」

「そうだけど、彼女が飲ませたわけじゃない。試作段階の薬を勝手に実行犯の男が飲ませたんだ。研究者として、試作段階の薬を使われるのは不本意だったと思うし、そもそも飲ました男は殺す気で飲ましたんだ。薬の存在がなければ、別の方法で江戸川君は確実に殺されたはずだし。で、そうなると小さくなったとはいえ、命を永らえたのだから文句は言えない」

妙に説得力のある礼二郎の言葉に、景は何も言えなくなった。

そして止めとばかりに礼二郎は続けた。

「それにね、江戸川君には灰原さんの姉を守れなかった負い目があるんだよね」

「姉……組織に殺された？」

「そう、宮野明美。彼女の関わった事件に江戸川君も絡んでいたんだ。だからなおのこと責められる立場じゃない」

「……実にすっ飛んでて、んでもって複雑な事情よね」

「まあね」

話が進むたびに現実感が薄れていくのを感じて、景は身震いした。

「これが、彼らの……大雑把ではあるが、真実だ。何か、質問とか

ある？」

景はこの事実になんにも動揺してはいない。

にも関わらず、平然とした表情でそんなことを聞く礼二郎を、景は少し憎たらしく感じ、

「随分灰原さんの肩持っちゃってるけど、もしかして気に入ったの？彼女」

と意地悪な質問を試みた。

「うーん…別に？」

礼二郎は特に表情を変えないまま素で答えたので、眉間に皺を寄せるなり、動揺するなりするんじゃないかと期待していた景は、肩透かしを食らって思わず仏頂面になった。

「あはは。面白い顔」

あまつさえその仏頂面を笑われて、景はさらに憤然とした。

「ごめんごめん、そんなに怒らないでよ」

「うつさい、このすけこまし！」

「……………。確かに僕は女性暴員ではあるけど、別にたらし込んではいないよ？」

「うつそ！そんなわけじゃない。この前麻薬常習の女子高生をたらしこんでたわ」

「警察の手伝いでちょっと事情聴取に立ち会っただけじゃないか」

「そーかなあ？取り調べ終わった女子高生、宮沢君に惚の字だった気がするけど？」

「あー、あの君の不躡な視線…なるほど。そういう感覚であの子を見てたわけね」

「何飄々と納得してんのよ」

「つーかね、桐山君。それを言うなら僕より、江戸川君の方がよっぽどすけこましだと思うけどね」

「……………なんでよ」

強引に話をそらされた感はないが、かと言って聞き流してしまふにはちよつと惜しい礼二郎の言葉に、景はしぶしぶと言った感じ

で先を促した。

「毛利さんに好かれ、同級生の吉田歩美ちゃんに好かれ——中学生になった今、交際を申し出る女子は……まあ、多いね、すごく」

「やっぱそうなんだあ。確かに江戸川君、灰原さんもだけど、モテそうな容姿してるもんね」

景はそう言つと、ニヤリと笑い、

「実際、張り込んでて、灰原さんにクラっとなったりとかしなかった？」

「だから、何でそうなる？」

せっかく話がそれたのに、また振り出しに戻すようことを言う景に、さすがの礼二郎もウンザリしたような顔をした。

それを見て、何故か満足げな表情をした景は、

「だって宮沢君、年下好きじゃん」

と言った。

この一言に礼二郎は大きく嘆息した。

「僕にロリコン趣味は皆無だよ。それにね、灰原さんには彼氏いるし」

「え？彼氏いるの！？」

驚愕する景に、礼二郎は何でもないうちに江戸川コナンの写真を指さして言った。

「うん。彼がそう」

「うっそおお！？」

景が絶叫する中、礼二郎は耳を押さえながら「本当だよ」と肯定する。

「何で！？何でそうなるの！？」

二人の事情を知った景にとって、その組み合わせは絶対にはずれていると思っただけに過剰反応してしまう。

「いや、ほら。この二人の状況である意味運命共同体なわけでしょ？いろいろと思うところがあったんじゃないの？」

どこか軽いノリで言う礼二郎と信じられないと言った顔つきの景。

「……なんだか毛利さんが可哀想ね」

「まあ、悪く言えば行方不明になった彼を一途に待つ毛利さんの傍らで、小さくなった想い人は別の女と、しかも小さくした薬を作った女とくつついちゃうわけだから。当事者はどうあれ、傍目からは灰原さんが江戸川君を毛利さんから奪ったように見えるよね」

礼二郎の淡々とした言葉に、景は苦虫を噛み潰しまくったような顔をした。

「傍目がどうって言うより、普通にひどい話だと思うんだけど、それ」

「まあね。でもさ、ばらしたら毛利さんまで黒の組織に狙われるわけだし。いろいろ考えて言うことを避けたんだよ」

冷静に語る礼二郎に対して、静かに憤慨した景は、語気を荒げた。

「そうだとしてもよ！もう組織は潰れたわけだし隠す必要もないじゃない。普通は元に戻って毛利さんのところに帰るのが筋なんじゃないの？」

「わかってないなあ、黒の組織は一年前にやっと潰れたんだ。確実に崩壊するまで秘密にするのは当たり前だし、如何せん時間のかけ過ぎさ。黒の組織の所有していた情報は、政界の重鎮、警察官僚の犯罪隠蔽の証拠や、連中の関わっていた事件の概要とかばかりで、薬物関係の情報は微々たるものだったから、解毒剤の開発は滞っていたと聞いたし」

礼二郎の話を黙って聞いていた景は、はたと何かに気づいたような表情をした。

「解毒剤って……灰原さんが作るのよね？」

「他に誰が作るのさ？」

質問の意図が掴めず、礼二郎は怪訝そうに目を細めたが、先を促すべく肯定的な返事をした。

「そうよね。となると、もしかしたら灰原さんって、江戸川君に恋しちゃって、わざと解毒剤作らなかったんじゃないのかな？灰原さんが解毒剤でしか彼を繋ぎ止めておける術を知らなかったとしたら、

あり得るんじゃない？解毒剤が完成しなければ、彼は毛利さんの所へはいけない……」

「……あり得なくはないけどねえ……何か……君の中じゃ最早完全に灰原さんは悪者扱いだね」

若干呆れたように礼二郎は言った。

「元より最初は敵のお仲間でしょ？……まあ、その辺は差し置いてもさ、江戸川君と毛利さんの間を自分の作った薬で謀らずとも引き裂いておいて、よくまあ江戸川君と付き合えるわよねって言いたいわけ。江戸川君も江戸川君よ。毛利さんってのがありながら何やってんだか」

確かに景の言い分も一理ある。

だが、礼二郎はどうしてもそうは思えなかった。

「君の言い分はよくわかるけど、江戸川君だって相当悩んだだろうし、灰原さんもたくさん苦しんだんだよ。今は解毒剤ができないことは科学的に見てもうほぼ不可能なのは立証済みなんだし。どう足掻いたって彼らは元に戻ることはできないんだ。二度と工藤新一に戻れない江戸川君の悲しみが君に分かるかい？……そんな彼の横で、罪悪感を感じ続けた灰原さんの気持ち分かるかい？……分からないだろ？僕だって分からない。あの二人はさ、待つてるだけで何も見ようとしなかった毛利さんとは違って、絶望を幾度も見せられて、数奇な運命に翻弄され続けてきた。君はまあ、直にあの二人見てないからちよつと分かんないかもしれないけど、あの二人、同じ目をしているんだ。何だが仄暗い、深い哀しみを宿したようなそんな目さ。毛利さんには悪いけど、毛利さんに江戸川君の支えになつてあげることとはできないと思う。もちろん灰原さんがその辺の男に支えられるはずもない。あの二人は、互いが互いのいろんな哀しみを半分ずつ背負うことで何とか立っているんだ」

礼二郎はそこまで言うとおもむろに窓の外を見た。

午後七時——。辺りは廃れきったネオンがぼんやりと光り、降り始めた雪を淡く照らしている。

景は、言い返せずに俯いた。

自分の言ったことは間違いだとは思わないが、礼二郎が言ったことも間違いとは思えなかったのだ。

何だかしょんぼりしてしまった景を見た礼二郎は、慰みも含めた悪戯っ子のような笑顔を向け、

「じゅうだいはっぴようお！」

とめちやくちなイントネーションで言った。

あまり、ふざけたことを言わない彼の奇妙なテンションに、景は俯いていた顔をあげ、小首を傾げた。

「ホント言つとね、桐山君。僕はこの件、ここまで関わる気はなかったんだ」

「……うん」

礼二郎が一体何が言いたいのがよく分からなかったが、とりあえず頷いてみる。

「しかしね、こう、二人を張り込んで見ているうちに感情移入しちゃってね。この時点で探偵失格なわけだが――」

「……うん」

「それで、ちよつと何かしてあげたいなあとか思ってたね、毛利さんに調査報告するの今日のもうすぐなんだけど……その二人も呼んじやった」

「……うん……ん？……は？………はあ！？」

景は思わず自分の耳を疑った。礼二郎は調査対象の人物と接触したと言っているのだ。

これは探偵として、してはいけない基本中の基本である。

「ちよつ、何で呼んじやうのよ！？」

「二人に会ったときにね、どのみちばれてんだから、けじめくらい自分でつけたら？って言ったら今日来ることになったんだよ」

何て無責任な！

「信じらんない！」

景はさすがに我慢できずに怒鳴った。

礼二郎はテーブルに置いていた二枚の写真を内ポケットに仕舞いながら、景の顔を見て苦笑した。

「そんな心配そうな顔しないでよ。大丈夫、江戸川君も灰原さんも覚悟は決めているみたいだし。毛利さんさえ理性を失わなければ何とかなるよ」

「……なるわけないじゃない」

景は呟くように言った。

さっきの話を聞いている感じでは、毛利蘭の理性は絶対に持たない。そう思ったのが顔に出たのか、礼二郎は柔らかに微笑むと、

「だから心配ないって」と言った。

「——でも！」

どうにも不安がぬぐえない景が言い返そうとしたとき、ドアをノックする音が聞こえた。

礼二郎は立ち上がると、早足でドアまで歩き、

「やあ、早かったね」

ドアを開けた。

「こんばんは」

そう言っただけで入ってきたのは、黒縁眼鏡の少年、江戸川コナン。

「……どうも」

その後ろから続くのは、赤がみかかった茶髪の少女、灰原哀。

景は思わず息を飲んだ。

似ているのだ、雰囲気。全体を漂う歳不相応の貫録。どこまでも大人びた表情。

そして何より、瞳から感じる光が同じだった。どこか仄暗く、それでいて淡く光っている。

感覚で言うなら、それは罪悪感の光だ。

大切な人たちを騙し、偽り続けてきたという——罪悪感。

固まったまま江戸川と灰原を凝視する景を尻目に、礼二郎は二人に先ほど何ら変わりのない柔らかい笑みを振りまいた。

「毛利さんはまだ来てないから、とりあえず空いている席に座ってあ。そこで呆けている助手は気にしなくていいから」
そして、相変わらずな自然体で、礼二郎は二人を促した。
景は正面に座る江戸川と灰原をじっと見つめる。

ただひたすらに、じっと見つめていた――。

――数日後。

雪降り積もる元旦。午前八時三十分。

「明けましておめでとう、宮沢君。さっそくだけど、年賀状来てるよ」

雑居ビルの最上階のドアを開けながら、景は元気よく入ってきた。

大量に來ている年賀症を小脇に抱え直して、室内を見渡す。

と、ソファで毛布に包まって爆睡している礼二郎を発見する。

「何だ、寝てるの？」

仰向けで気持ち良さそうに寝ている礼二郎を見やりながらつまらなそうに言つと、景は礼二郎の鼻を摘んだ。

「……………ふ、くあ」

礼二郎は息苦しそうに喘ぎ、

「あ？」

目を覚ました。

「あ、起きた。明けましておめでとう」

「……ん。おめでと」

緩慢に起き上がった礼二郎は、激しく寝癖で乱れた髪をガリガリと掻き、むにやむにやしがなら言った。

「こりゃ、コーヒーが必要ね」

その様子に苦笑しながら、景はキッチンへと向かった。

「んー。ありがとー」

大きく欠伸をしながら礼を言った礼二郎は、テーブルに置かれた年賀状の束を見やった。

「……………あ」

束の一番上の年賀状を手にとった礼二郎は、小さく声をあげた。

明けましておめでとうございます。

文はそれだけしか書かれていなかったが、パソコンで貼ったのか、どこかの部屋をバックに、寄り添った少年と少女の写真。

その写真の中の二人は、照れてはにかんだような顔でこちらに笑いかけている。

礼二郎は満足そうな顔をして写真から視線を外すと、二つコーヒの載ったお盆を持った景が立っていた。

「……………幸せになるといいね」

礼二郎が言うつと、景は優しく笑って、

「うん」

と頷いた。

宮沢礼二郎と桐山景（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。

インタビュー（前書き）

設定 中学生時代。

インタビュー

吉田 歩美

——それでは、初めに自己紹介をお願いします。

「あ、はい。帝丹中学三年の吉田歩美です。部活はテニスをやってます」

——では、これから、吉田さんのクラスメートである、江戸川コナン君と灰原哀さんについて、いくつかの質問をしていきたいと思えます。

「はい」

——江戸川コナン君の印象は？

「印象——？うーん、頭が良くって、スポーツ万能で、カッコいい人……かな。あはは、なんか照れますねえ、これ」

——灰原哀さんの印象は？

「哀ちゃんですか？……えーと、あんまし表情とか無くって、たまにしか笑わないけど、優しくてすごく可愛いとこあるんだよ」

——二人の関係について。

「恋人よ、恋人」

——いつ頃から？

「中学一年からかな。でもね、私、あの二人はもっと早い段階から好き合っていたと思うの」

——というと？

「私達、小学校低学年からの付き合いなんだけど、その当時からこう、二人にしか分らない話とかよくしてたし。なんか割って入れないような奇妙な繋がりがあるっぽかったし。その時の私はコナン君がすごく好きだったから、そういうの見て、子供ながらに結構傷ついた記憶はあるかなあ」

——マセてますね。

「あはは。確かに私の場合はただのおませさんだったかもしれないけど、あの二人はそう言うませた感じが自然だったわね」

——最近の二人について。

「ラブラブだよ。二人とも奥手だから傍目からはよくわかんないけど、うまくやってるみたい。——でも…」

——でも？

「ここ最近元気ないのよね、あの二人」

——何故？

「毛利蘭さんって知ってる？名探偵毛利小五郎の娘さん」

——サーカスクラウン事件でお亡くなりになった人の一人ですね？
「そう、その死んだ人。私達が小学校低学年の時お世話になったお姉さんなの。高校卒業してからは近所の大学に通ってたみたいで、会うこともなくなったんだけど、コナン君や哀ちゃんとはたまに会ってたみたいなの。だから引きずっているんじゃないかな、蘭さんが死んだこと」

——毛利蘭さんに対して、吉田さんは随分淡泊ですね？
「幼い時に時々どこかに連れて行ってもらった程度だし、正直ちゃんと顔も覚えていないの」

——あのサーカスクラウン事件に江戸川君と灰原さんが関わっていたことは知っていますか？
「え？そうなの？知らなかった。コナン君と哀ちゃんが付き合い始めてから、私疎遠気味だし」

——友人二人が事件に巻き込まれていたと知ったのに、あまり驚いていませんね？
「あの二人だったらあり得るからね。もう一種の呪いみたいなものよ」

——わかりました。質問は以上です。ご協力ありがとうございます。
た。

「あ、そうなの？じゃあ、私はこれから部活に行きますけど、あの

二人に私がこんなこと言ってたなんて言わないでね」

高木夫人

——それでは、初めに自己紹介をお願いします。
「高木美和子よ」

——さつそくですが、帝丹中学校に通う江戸川コナン君と灰原哀さんをご存知ですか？

「ええ、知っているわ。あの二人には昔からよく助けてもらっているから」

——二人とも頭がいいとお聞きしましたが？

「……頭がいいのは確かだけど……何て言ったらいいのかしら……彼らが用いる知識って、年齢とのずれを感じるような知識ばかりなのよね」

——ずれ？

「そう。世代的なずれって言うか。それに何でもよく知っているし。知識だけでなく、大人以上の機転と躊躇のない行動力。正直あれがまだ十代半ばの少年少女とは思えないわ」

——では、彼らは何者だと思われますか？

「……それがわからないのよねえ。うちの主人はね、本当はあの二人は大人で、何らかの理由で小さくなっているんじゃないか？なんて世迷い言を一時期本気で信じていたけどね」

——旦那さんはその話をどこで聞いたと言っていましたか？

「え？……そうね。言い出したのは確か……蘭ちゃんじゃなかった？」

——サーカスクラウン事件でお亡くなりになった方の一人ですね？
「……ええ、そうね」

——あの事件の担当は？

「ごめんなさい。事件に関することは口にできないの」

——では、あなた個人として、あのサーカスクラウン事件について、どう思われますか？

「何、その事件からは話はズレないわけ？」

——ズレません。

「あ、そう。私個人ね。んー、そうね。あの事件はコナン君を中心とした事件っていう印象を受けたわね」

——というと？

「あの事件で亡くなった人たちは彼と面識がある人物だったの」

——毛利さん以外の被害者にも面識があったと？

「そうよ。蘭ちゃんを含め、服部君、黒羽君、白鳥君の四人——つて名前は新聞に載ったことあるから知ってるわよね」

——その亡くなった被害者と江戸川君の関係は？

「毛利さんは幼馴染……って知ってるわよね。えーと、ざっくり言うなら服部君は親友でライバル、黒羽君とは鬼ごっこの仲、白鳥君は私と一緒に事件がらみの知人……っていったところかしら」

——あの事件は、事件と言うよりゲームというニュアンスが強いとおっしゃった人が一人いますが、それについてはどう思われますか？
「ゲーム……ねえ。まあ確かに、遊んでる感はあるわね。目的も犯人も分からずじまいだったから断言はできないけど」

——わかりました。質問は以上です。ありがとうございました。
「あら、もういいの？それじゃ、私は買い物に行くけど、その前に私からも一ついいかしら？——あなたは信じる？大人が幼児化するなんてことを……」

鈴木園子

——それでは、初めに自己紹介をお願いします。

「鈴木園子」

——では、今から早速質問の方に入りたいと思います。
「早くしなさいよ」

——江戸川コナン君と灰原哀さんについてご存知ですか？
「ええ、知ってるわよ」

——最近、この二人に関する奇妙な噂を耳にしたことはありません

か？

「……………」

——質問にお答えください。

「あるわ」

——それは、どんな噂ですか？

「あの二人は本当は大人で、何らかの原因で体が小さくなっているってやつでしょ？」

——その噂を信じていますか？

「ええ、信じているわ」

——何故？

「何故？見て分からない？灰原哀はどうだか知らないけど、江戸川コナンは年取ることにあいつに似てきているじゃない！」

——あいつとは？

「工藤新一よ！」

——数年前。警察の救世主と謳われ、平成のホームズという二つ名を持つ、東の名探偵、工藤新一のことですか？

「他に誰がいるのよ！」

——工藤新一は、両親からの失踪届が出ており、現在は死亡扱いになっ
ていますか？

「だから、江戸川コナンが工藤新一だって言ってるの」

——根拠は？

「これよ」

——これは？

「蘭が渡してきたの」

——サーカスクラウン事件でお亡くなりになった人ですね。

「そう。実はその事件が起こる少し前に彼女と会ってるの、私」

——何を話されたのですか？

「別に、普通の世間話。恋愛の話とか、テレビの話とか……で、二
時間くらい話して、そろそろお開きにしようとしたら、蘭が深刻そ
うな顔をして切り出したの。新一と話をつけてきたって」

——死んでいるはずの工藤君と？

「だ・か・ら、江戸川コナンが工藤新一だって言ってるでしょ！……
で、蘭はあるとき、そこそ腕のいい探偵雇って江戸川コナンの
ことを調べさせたの。裏を取っておかないと口八丁ではぐらかさ
れるのがおちだったらしいから」

——では、毛利さんに渡されたというこれは、その調査資料だと？
「そうよ。しっかしなかなかの探偵よね。十日そこらでほとんど調べてしまったのだから。そしてその資料は江戸川コナンが工藤新一であるという結論に達しているの」

——何故、毛利さんはその調査資料をあなたに？

「……もしかしたらいろいろな感情に折り合いをつけるためだったのかもしれないわね」

——折り合い？

「ええ、これを渡してきた時の蘭の顔は、なんかいろいろな感情を無理やりねじ込んだような複雑な顔してたわ。多分、新一君に裏切られたことを頭では理解しているんだけど心がついていなかったのね。……でもね。蘭は私に対して必死に笑おうとしてた。ちゃんと受け入れようとしてた。……現実に、ちゃんと向き合ってた——なのに……なのによ……あんな事件に巻き込まれさえしなければ……蘭は……」

——サーカスクラウン事件の目撃者の一人に……毛利さんが江戸川君を殺そうとしていたという証言がありましたが……これについてはどう思われますか？

「何それ！嘘に決まってるじゃない！蘭がそんなことするわけない！その目撃者は新一君とグルなんだわ！」

——現場から回収されたサバイバルナイフに付着していた血は、江戸川君のものであり、グリップには毛利さんの指紋しかなかったと

いう話ですが、これについてはどう思われますか？

「そ、それも新一君がさった小細工に決まってるわ！——あなた、いったい何が言いたいのか！？」

——毛利さんにはあの事件の犯人の共犯であるという噂があるのですが？

「——な！？あ、ありえない！そんなバカな話、あつてたまるもんですか！」

——ありがとうございます。質問は以上です。

「ちよつ、ちよつと待ちなさいよ！訂正しなさい！蘭は犯罪なんて絶対にしない！これは、新一君の罠なのよ。あいつが、あのガキがすべてをめちやくちやにしたのよ！蘭を殺したのは！工藤新一なのよおおおお！！！」

小嶋元太

——それでは、初めに自己紹介からお願いします。

「おう！帝丹中学三年、小嶋元太。柔道部のキャプテンだ！」

——それでは、同級生である江戸川コナン君と灰原哀さんについて質問します。

「いいぜ」

——江戸川コナン君の印象は？

「そうだな。あいつはかつこついで、気障で、鼻持ちならぬくらい頭がいい。運動もできるしな。けどお人好しで、なんだかんだいいながらも結局は最後まで付き合ってくれるいい奴だよ」

——灰原哀さんの印象は？

「愛想無くて、ツンツンしてて、言い回しがいちいち癪に障るが、根は優しいし、人一倍他人思いのいい奴だよ」

——江戸川君と灰原さんが恋人同士になって以来、吉田さんは疎遠気味だと言っていました。あなたはどうですか？

「いや、別に。歩美はほら、コナンのこと好きだったからちよつと複雑なんじゃねーの？ 光彦も俺も、今までとそんなに変わんねーし——っ！ か歩美、そんなこと言ってたのかよ？」

——最近、二人は元気がないようですが？

「そうなんだよな。直接聞いたわけじゃねーけど、あのねーちゃんが事件に巻き込まれて死んだのがこたえてるみたいださ」

——サーカスクラウン事件で亡くなった人ですか？

「おう、良く知ってたな。そうなんだよ」

——あの事件に江戸川君と灰原さんが関わっていたことはご存知ですか？

「ああ、知ってるぜ」

——誰から聞きました？

「誰って、光彦だけだ」

——円谷光彦君は、誰から聞いたと言っていましたか？

「ああ、あいつ、あの日事件のあった現場付近にいたんだよ。で、なんかあやしげな怪人と血塗れのコナンと灰原が廃ビルのフロアで対峙してたっていうんだ」

——怪しげな怪人とは、白い仮面をかぶった黒ずくめの男のことでしょうか？

「多分な。あいつ警察に連絡しようとしたら、銃撃音が聞こえてビビったらしくて、とっさに近くにあったロッカーに隠れたから、そんなにしつかりとは見てねーとかいってたけどな、その男のことはでも、たまたま入ったそのロッカーで、面白いもん見つけたって言うってたな」

——面白いもの？

「ああ、何かパソコンで見るデータで……えーと何て言ったか……何かの薬……アポキシなんたらがどーのこーのって……俺そう言うの苦手だから適当に聞き流したんだけど、光彦の奴かなり興奮してたな」

——怪人と江戸川君たちのいた廃ビルとは、どこのビルですか？

「さあ、詳しくは聞いてねーけど……あー、ほら、二年くらい前だっ

たか？たぶんそれくらい前にでつかい事件あったろ。『黒の組織』事件だっけ？あれの現場と同じ場所だって光彦は言ってたような気がするな」

——わかりました。質問は以上です。ご協力ありがとうございます。
「何だ、もういいのかよ。…あ、そうだ。これからさ、久々に五人でラーメンでも食いに行こうかって話になってるんだ。よかったらあんたもどうだ？」

——五人というと、吉田さん、円谷君、江戸川君、灰原さんと君？
「そうだ。言いだしっぺはもちろん俺で、珍しく灰原も乗り気でさ」

——いいんですか？
「いいぜ。人数は多い方が楽しいしな！」

——では、お言葉に甘えて……。
「そうこなきやな！——お、あいつらだ。…おい、遅かったじゃねーか！」

——あなた方は、仲がいいですね。
「まあな。でも小学生じゃねーし、皆変わってきてるんだ。歩美は俺達から一歩引いたところで俺達を見てる感じだし、コナンと灰原は付き合っちゃうし、光彦は秘密主義の色合いが強くなったし、こーやって集まる回数だってなんだかんだで減ってるしな」

——寂しいですか？

「うーん、そうでもねーぜ。根拠はねーけど確信があるんだ。十年後、二十年後になっても、俺達はまたこうやって集まれるんじゃないかって」

——変わらないものはあると？

「ま、俺の根拠のない希望だけだな」

——十年後、こうして集まるといいですね。

「ああ、そんなときはあんたも呼んでやるよ！」

インタビュー（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。

サーカスクラウン事件についての考察（前書き）

設定 中学生時代。

サーカスクラウン事件についての考察

鈴木園子の結論

結論から言つて、私はこの事件は江戸川コナンとその恋人、灰原哀が事件の真犯人だと思つてゐるわけよ。

つまりは四月二日、一時半頃、あー、午後ね、午後。服部君が撃たれたことから始まつてるのよ、あの事件は。
『サーカスクラウン事件』って呼ばれてるわ。何でかはよくわからないけど。

その後、その日のうちに白鳥元刑事、黒羽君、蘭と私の友人知人が殺された。

さつきも言つたけど、最初の被害者は服部平次君。

西の名探偵の二つ名を持つ彼は、毛利探偵事務所に来ていて、そこでコナン君に至近距離から銃殺されちゃうの。

彼がやった明確な証拠は何もないって話だけど、毛利探偵事務所に呼びつけたのは彼であることや、第一発見者であるはずなのに警察に連絡もせず、その後行方をすぐにくらますなんて、まず彼が犯人であることに間違いはないと私は思うわけ。

——短絡的？知つたこっちゃないわね。

第二の被害者は白鳥元刑事。

米花公園ベンチに爆弾と一緒に縛られたまま、こめかみを撃たれて即死。むごい死に方よね…。

なぜベンチに縛られていたかや、細かいことはわからないけど、現場で巻き込まれた少年たちが、やはりコナン君を目撃していることから、これも彼の仕業と思われる。

——状況証拠も甚だしい？だから知つたこっちゃないわよ。

第三の被害者は、怪盗キッドこと黒羽君。

コナン君は白鳥刑事の死亡後、その足でバスジャックをしでかしている。その乗客の一人だったようで、巻き沿いを食らい、コナン君の撃った凶弾にその短い人生を終えた。

怪盗であるならば、もつとうまくできなかったの？と思わなくもないけど、一緒にいた彼女を守った結果だって言うじゃない。

めっちゃ美談じゃない。涙ぐましいじゃない。

つか、いくらなんでもそこまでやる？江戸川コナン。

服部君撃ち殺して、白鳥元刑事を撃ち殺して、黒羽君撃ち殺して

——、
そして、蘭を刺し殺した。

コナン君が工藤新一だったこと、私はついこの前知った。

正直、最初蘭からきり出された時は混乱したし、動揺もした。

けど蘭は本気だったし、そういう嘘をつかないことを何より私はよく知っていたから、素直に信じた。どっかの探偵が調べた調査資料も後押しがきいていたし。

コナン君はきつと、蘭が邪魔になったんだ。

新しい女が出来たから。健気に待つ蘭が邪魔で邪魔で仕方なかったんだ。

他の殺された人たちだって、きつと似たり寄ったりな動機で殺されたんだと私は思う。

邪魔だとか、秘密を知り過ぎたとか、なんかそんな感じで。

—— 適当過ぎ？知ったこっちゃないわ。

江戸川コナンの証言

四月二日。

この日を俺が忘れる——なんてことは、今後一切ないだろうと思う。

四月二日。毛利探偵事務所での服部殺害から始まった連続殺人事

件、通称『サーカスクラウン事件』。

この、俺の友人知人を四人もことごとく死に追いやった事件の始まりは、ホントのところ、阿笠邸に居た俺の携帯電話が鳴った時点ですでに始まっていた。

『もしもし？江戸川コナン君で間違いないでしょうか？』

「………………。はい、そうですけど。えっと、どちら様ですか？」

『灰原哀を預かっている者です』

あの日は灰原が歩美とショッピングに行くと言うので、俺はそのあと仮眠をとっていたわけだが、正直、背中に思い切り冷や水をかけたかのように心臓が飛び跳ねたのを覚えている。

「…………。何？」

『——ですから、あなたの恋人、灰原哀を預かっている者です。』

…あ、この言い方だと少々語弊がありますね。あなたの恋人、灰原哀を預かっている者を知っている者です。うん、これが正しい』

「ふざけてるのか？アンタ。何の嫌がらせだ？」

一瞬、いたずらかと思った。なんせ言っていることが丁寧なようにいて、まったくよくわからないのだ。

『何を言っているんですか？私はいたって真面目に話しているつもりですが』

いやいや、馬鹿丁寧で、しかもどこかハキハキとした女の声で言われたら、普通ふざけているのかってなるだろう。俺の感性は間違ってたなかったはずだと今でも思う。

「——何者だ？」

『サーカスクラウンと申します。以後はクラウンと呼ばれてもらって結構です』

「……。馬鹿にしてんのか？」

『いいえ、さつきいたって真面目に話していると言ったばかりではないですか？聞いてなかったんですか？』

「…………。どこの世界にそんな緊張感の欠片もない爽やか感じで誘拐したことを告げる奴がいる？」

『信じていないんですか？』

「信じるも何も灰原はついさっきまで一緒に——あれ？」

『——二時間も前の話でしょう。まだ寝ぼけているんですか？そう、買い物に行かれたんですよねえ。吉田歩美と』

ここで、俺の警戒レベルはMAXになった。

この電話の女は、どうやらこっちをどこからか監視していると思ったんだ。

だってそうだろ？俺が寝ていたことや、灰原の外出時間まで正確に言ってきたということは、見られていると思うじゃないか。

そういや、このときはそう判断すると同時に、心の隅で「俺、二時間も寝てたっけ？」と首を傾げてたな。腕時計は確かに眠りそうになっていた時間からきっちり二時間の午後一時二十五分を指していたけれど。

「……………」
『さすがに沈黙しましたね？今日は吉田さんとショッピングの予定だつてあなた知ってますものね。しかし吉田さんもひどい人ですよ。ね。ドタキャンするなんて……。せつかく灰原さん、疎遠気味の彼女を氣遣つて誘つたのにねえ』

この話題が出てから、だんだんこいつの口調は馴れ馴れしいもの
に変わつていった。

だが、言葉遣いがどうのというより、ここまで事情通の誘拐犯つ
て何なんだよ！？つて疑問の方が圧倒的に強かったが。

何にせよ、このふざけた野郎は本気で灰原をさらっていることは
十分に分かつたんだ。

相手が今まで相手にしてきた犯罪者つばくはないためか、逆に不安が
せり上がってきたのを覚えている。

『まあ、そんな話とはかくとして——』

「お前から振つてきたんじゃないかよ。つーが無事なんだろうな！
？」

『ええ、無事です。今のところは、ですが。——それでは本題で
す。灰原哀を助けたければ、服部平次のところに行きなさい。彼が
灰原さんの居場所を知りえているかもしれませんし』

「……………は？」

『どうしました？』

「どう、したつて、何だそれ！？それが要求か！？」

『？……と、言いますと？』

「や、だつて、誘拐はこういうとき、身代金や脅迫が普通だろ。な
んだつて服部に会いに行けなんだ？——ちよつと待て。なんで服

部が灰原の居場所を知っているんだ？」

『質問の多い方ですね。さっき言いましたよね。私は灰原哀を『預かっている者』を知っていると』

「……………。だから？」

『ぶっちゃけちゃうとですね——服部君は今、灰原哀を預かっている者と接触しているんですよ。毛利探偵事務所ですね。故に、彼が彼女の場所を知る可能性はあると、こういうわけです』

「何で、あいつがそこにいるんだ？」

『私があなただと偽って呼びました』

「てめえ、服部も人質ってわけか！？」

『違いますよ。彼は一切拘束されていません。まあ、今はあなたがいると思っていた事務所に違う人物がいるわけですから面喰っているでしょうけど』

「……………。ちよつと待て、じゃあ」

『そうですね。探偵服部君は自分がどれだけ危険な状況に陥っているか、中途半端にしか理解してないでしょう。ですから下手に勘ぐって殺されてしまう可能性は十分あります』

俺は聞くやいなや阿笠邸のドアを叩き開け、スケボーをとばした。

高木警部補の真実

正直に言うと、この事件は自分の許容範囲を超えていた。

『黒の組織事件』に並ぶ犯罪（とはい切れないか）でありながら、その展開のスピーディーさから、警察は終始殺人犯を追うというより、殺害現場を追うような無様な状態であった。

最初の殺害現場を聞いた時は本当に驚いた。

——毛利探偵事務所。

本気で耳を疑ったのを覚えている。

しかも殺されたのは西の探偵という二つ名を持つ服部平次。

犯人にこめかみを銃弾で至近距離から打ち抜かれていた服部平次は、血まみれの顔に実にゆがんだ『笑顔』を貼りつかせていたことから、顔見知りの犯行として事件の調査に入り、すぐに事件直後に目撃された人物の存在が明らかになった。

それが、江戸川コナンだった。

事件直前に幾度となく服部平次の携帯電話に電話をしており、なおかつ事件後に行方をくらましている江戸川コナンを、警察は重要参考人として追うことになったのだが、展開は待ってくれず、すぐに第二の殺人は起きた。

江戸川コナンの証言2

阿笠邸から毛利探偵事務所まで、スケボーであんなに必死に走らせたのはあの時が初めてかもしれない。

だが、何にせよ、俺が探偵事務所についたときには、すでに服部は向かいのビルからこめかみを狙撃されて死んでいた。

『あー、もしもし？江戸川君ですか？』

「——てめえ……」

『おやおや、声が震えていますねえ。そんなにショックでした？だから言ったでしょう？服部君はあなたの恋人を預かっている者と接触している自覚がないって。あなただってこうなることはある程度予想できたでしょうに』

「ふざけるな！引き合わせたのはお前だろうが！」

『——ぶつ、あはははは！』

「何がおかしい！？」

『いやあ、ちよつと気分が良くて。どうです？親友をいとも簡単に失った感想は？』

「——貴様……」

『つらいでしょう？そりやつらいですよねえ。あなたには、この状況を打破するだけの時間と知識と行動力があつたはずなのに。それにも関わらず、服部君はあっさり死にましたよ。いやあ笑いが止まらないです。本当に』

「っざけんなっ！！」

『いいですねいいですね。あなたの怒りは私とつて、とても音色のいいものなんですよ。そうやって、じゃんじゃん私を楽しませてください』

こいつの嬉々とした声を聞いて、俺はうすら寒いものを感じた。
そして、灰原が今、こいつの手の内にあるのかと思うと、血が引いて行くような焦燥が全身に渦巻いたのを覚えている。

「黙れ、狂人がっ！一体何が目的なんだ！？」

『目的ですか？そんなものは今までの会話の中で何となく察しはついているでしょう？名探偵の江戸川君』

「………………。復讐か？」

『わーおー！大・正・解っ。さすが名探偵！——まあ、あなたが思っているような復讐とは大分毛色が違うでしょうけど。どちらにせよ、私の目的はあなたの絶望なんですよ、江戸川君』

「つつ！……！だったら俺一人を狙えよ！」

『いやいやいやいやいや。それじゃあ、駄目でしょう。あなたにてつとり早くダメージをあたえられるのは、身近な人間を殺すのが一番ですから。あなたは自身に降りかかる危険にはめっっぽう強いですからね』

こいつは本気で狂ってる。

このとき俺はそう思った。

『あー、それと安心しちゃいけませんよ。次に彼女の居場所を知っているかもしれない人物は白鳥元刑事です』

「白鳥？」

『はい。米花第二公園のベンチです。——それと』

「……………」

『助けは来ませんよ』

「……………」

『さっき、服部君にかけた時は害がないので放っておきましたが、あなたの携帯電話はもちろん、トランシーバーやイヤリング型携帯電話は簡単に妨害できますし、あなたは——分かっていると思いますが、ちゃんと監視しています。あなたの絶望する顔みたさのためでもあります』

「……………」

『ですから、諦めてトランシーバーの入ったポケットから手を出して下さい』

俺は奥歯を噛みしめ、悔しさで震えながら右手をポケットから出した。ホントに惨めな気分だった。

『わかったらとつとと白鳥元刑事の所に行ってください』

「——てめえ、ぜってえ会ったらぶっ飛ばす！」

『女に手をあげるなんて紳士のすることではないですよ。江戸川君』

俺は、死体の服部をそのままに、毛利探偵事務所を飛び出した。

飛び出す瞬間にちらりと服部の方を見たとき、歪んだ笑顔のまま死んでいる服部に、思わず悪寒が走った。

服部平次が死に、警察は正直、殺気立っていたと思う。何せ警察幹部のご息が殺されたのだ。だが、それをあざ笑うかのよう、あっさりと第二の殺人は起こってしまった。

——いや、すでに起っていたにも関わらず、気付かなかったのだ。

便宜上、第二の殺人現場となったのは——米花第二公園。

ここで殺されたのは白鳥元刑事。

彼は公園に設置されているベンチに座ったまま巧妙に縛られており、口にガムテープで閉じられ、カモフラージュにマスクをさせられており、膝にはアタッシュケース。そしてその中には偽物の爆弾が入っていた。

死亡推定時刻は早朝五時から六時にかけて。死因は銃弾でこめかみを撃ち抜かれての即死。服部と手口が酷似していることから、連続殺人を視野に入れ、捜査を続行。

一人目の犠牲者が、警察幹部のご息、そして二人目（正確にはこちらが一人目だが）の犠牲者が元警察官だったこともあり、殺人事件としては異例の動員数で捜査を展開。

ここでもやはり、江戸川コナンの目撃情報が寄せられ、彼を見つけて出すことが最優先事項となる。

江戸川コナンの証言3

米花第二公園。

それほど大きくもなく、大した遊具もなく、言ってしまえば至極寂れているその公園のベンチに、何やら浮浪者然とした白鳥元刑事は座っていた。

口には大きなマスクをしており、膝には今の白鳥元刑事にはまるで似合っていないアタッシュケースが乗せられていた。

「……………。白鳥」

「……ン！……ンンン！——ン——ン！」

俺が来たのを見て、心底安心したような表情をする白鳥元刑事。

呻き声しか出せないところを見ると、マスクの下の口は何かで塞がっているに違いないと思った。

——と、そこへ、案の定電話が鳴った。

『早かったですねえ。その分だとまだ生きてるでしょう？白鳥元刑

事は。ふふ、相当スケボーをとばしましたものね、江戸川君」

「黙れ」

『白鳥さん、面白いことになってるでしょう？それと膝の上のアタツシユケース……。何なのかもうお解りですよね』

「……。爆弾か？」

『またまた大・正・解っ！さすがですね、名探偵』

「……。俺に解体しろと？」

『そういうことですね』

俺は、先ほどから唸り声をあげている白鳥元刑事の膝にある、アタツシユケースをゆっくりと開けた。

「——は？」

『どうです？』

「……。いや、どうですって」

正直、俺は反応に困った。

確かに、中には確かに爆弾だった。タイマーももちろんついており、そのタイマーは後三分で爆発することを無慈悲に告げていた。が、その構図は恐ろしいまでに、シンプルだった。

『いやあ、ここで爆弾を無駄に複雑化したって、結局は赤か青かじゃないですか。最終的にはファイファイファイなら、最初っからそうした方が、わかりやすいでしょう？』

爆弾から伸びたコードはたった二本。

赤か、青か。

しかも、ご丁寧にあッツシュケースにはニッパーまで入っていた。

「ハッ。あくまで遊び——そんな感じだな」

「わかってきたみたいですね、江戸川君。君は小細工が得意ですからね。そういうものを封じるには、あえて状況をシンプル化した方が、追い詰めれるんですね。——あと二分ですよ」

「他にどうすることもできない状況をシンプルに演出するってか。とことんクズだな、お前」

「ええ、私は外道でしょうね。しかし、それを言うなら、今ベンチに座っているその男も例外ではないと私は思いますよ」

「……何が言いたい？」

「白鳥元刑事が、なぜ刑事を辞めたのか……？あなた、ご存知でしょう？」

あの時、サーカスクラウンの声が聞こえていた白鳥元刑事は、俺の顔を見ながら涙でぐしゃぐしゃにしたのを覚えている。

「ああ」

「未成年者のストーキング、下着等衣類の窃盗、及び強姦未遂。まあ、灰原哀が被害者でしたからね。あ、というか、未然に防いで警察に叩きだしたのはあなたでしたよね？」

「……………。つまり何か、この腐れを俺が命をかけて救うかどうかってことか？」

「はい、そうです。あ、でもそんな私同様のクズな白鳥元刑事に、あなた自身が命をかける必要はありませんね——」

俺は、あまり時間がないので、サーカスクラウンの話を適当に聞き流しながら、白鳥元刑事の付けているマスクを取っ払い、口を塞いでいるガムテープを乱暴に取った。

本ならそのまま放置していたいところだが、服部と大まかな状況が同じなら、今生きている白鳥は、自分をこんな状況下においた犯人を見ていることになるからだ。

「ぶっはっ——い、痛いじゃないか！もっと優しくしてくれて——」

白鳥元刑事は、いつまでたっても自分が悪いことをしたという自覚がないようだった。

そんな、助けられて当たり前の態度をとる白鳥元刑事に、苛立ちながら、俺は問い質したんだ。

「——灰原を誘拐した奴はどんな奴だ？」

「え？」

「灰原を誘拐した奴だ！アンタをそんな風にした奴は誰だって言うてんだ？」

白鳥は、灰原が誘拐されていることは知らなかったので、戸惑ったようだが、自分をこんな風にした人物と聞いて、前のめり気味にガムテープの跡がついた口を開いた。

——毛利 蘭。

俺はあの時、思考が一瞬停止した。

ニッパーを握っていた右手は強く握り過ぎて白くなっていたと思う。
だが、白鳥元刑事は、間違いなく——そう言った。

『——その爆弾は、赤を切れば——って、あら、あらあら！もうばれちゃいましたか！？』

「どういうことだああ！？サーカスクラウン！！」

俺はほとんど八つ当たりで白鳥元刑事の顔面をぶん殴ると、赤いコードを切ってニッパーを放り捨てた。

『もう、江戸川君はせっかちですねえ。まあ、この辺ではれるようにしたのは私なんですけどねえ』

「答えろ、蘭に何をしたっ！？」

『恋人でもないくせに、えらい剣幕ですね』

「クラウン！」

『はいはい、ちゃんと答えますよ。灰原哀を預かっているのは毛利蘭です』

「っ！？」

『理由はわかりますよね。毛利蘭さんは、君を相当憎んでましたからね。気持ちを踏みにじって裏切ったあなたに対する復讐ですよ、復讐』

「蘭が……復讐って……。ちょっと待て！お前、黒の組織の残党じゃなかったのか！？」

『あはははははははははは！！！やつぱりそういう、素っ頓狂かつ滑稽な勘違いをしていましたか、江戸川君！！そんなわけないでしょう。君がぶつ潰した黒の組織は、利益基準で動く人たちですよ？一個人に復讐している暇があつたら次を構築するのに力を注ぎますよ。まあ、組織の基盤が出来上がったら、あなたを殺しに来るのは目に見えてますが。あなたはちょっといろいろ知り過ぎてますからね』

.....

『話は実に簡単。灰原哀を連れだしたのも、服部平次や白鳥元刑事を殺害したものも、ぜんぶ毛利蘭さんの仕業です』

「……馬鹿な」

『信じたくない気持はわからないでもないです。何せ一度はどこぞの探偵のおかげでお互いの溝は浅くなったわけですからね』

.....

『でも、まあ、人間の心なんて、そう簡単に整理がつくほど簡単にはできていないってことですよ』

「お前……。何者なんだよ？」

俺は脱力感に負けて地面に膝をつきながら、呟いた。

サーカスクラウンと名乗ったそいつは、目の前が絶望で眩む俺に、冷笑を電話越しに浴びせていた。

『ふふふふ。あなたは知っているはずでしょう、私のことを』

「……知るわけねーだろ」

「つれないですねえ。昔一度だけ、一緒に犯人探しに奔走したじゃないですか」

「え？」

「しょうがないですねえ」

いきなり、サーカスクランの声が、女からあどけない少年のような声に変化した。

それも、昔、聞いたことのある――。

『これなら分かってもらえますか？工藤新一君』

「――ま、まさか、お前っ!？」

『ふふふふ。では、最後です。もうすぐ、米花第二公園前のバス停にバスが来ます。それに乗ってください。――ああ、それと、白鳥元刑事にお別れは言いましたか？』

「――え？」

俺がベンチの方に振り返った瞬間、殴られて伸びている白鳥元刑事の膝にある爆弾が爆発した。

高木警部補の真実3

白鳥元刑事銃殺後、その足で江戸川コナンは米花第二公園前のバス

停からバスに乗り込み、そのままバスジャックを行った。
そのバスでたまたま乗車していた黒羽快斗が凶弾に倒れ、次いで乗っていた毛利蘭も胸をサバイバルナイフで一突きされて死んだ。

——と言ったのが、事件当初の見方だった。

実際は、まるで異なっていた。そもそもジャックしたのは江戸川コナンではなく、人質とされていた毛利蘭の方であった。

江戸川コナン自身の証言を聞いた我々警察は、彼が一連の連続殺人事件に全く関与していないことが分かり、米花第二公園横の雑居ビル内で、その証拠である、コークーンの装置と阿笠邸で秘密裏に保管されていた人工頭脳ノアズ・アークのデータが発見され、そこから毛利蘭の指紋が検出された。まあ、他にも誰かいたようで、何者かに一部データを持っていかれていたが。

バスジャックはそもそもこちらに対して何か要求するつもりでしたわけではなく、毛利蘭個人の突発的な行動によるものと判定。

安定を欠いた精神状態の毛利蘭に対して、不用意な行動に出た乗客、黒羽快斗は毛利蘭のリボルバーであっけなくその短い人生を閉じた。毛利蘭の死亡については、サバイバルナイフには彼女の指紋しかついていなかったこと、目撃情報や、当事者たちの証言から、自殺だということが分かった。

しかしながら、あの事件は、自分にとってトラウマ的な事件だった。

自分の知っている人間がこうもたやすく殺されていく。

警察の人間である自分が無力だということに気づくと同時に、ひどく自己嫌悪したものだ。

嫁はそんなに自分を責めることはないというが。

——人間、そんなに簡単に割り切れるものではないのだと自分は思

う。

円谷光彦の独語

四月二日。

僕にとってこの日は、人生のターニングポイントと言っても過言ではない。

何せ、とんでもない物を手に入れてしまったのだから。

そう、どれくらいとんでもないかと言えば、世界共通の概念の一つを完全に無視でき、完成させちゃったりでもしたら世界のバランスそのものを崩壊させてしまう可能性すらある薬物。

——アポトキシン4869。

その生成方法の一部が書かれたディスクを、僕はひょんなことから入手してしまったのだ。

一介の中学生である僕には、その一部に書いている内容はチンプンカンプンではあったが、『あの話』に信憑性を持たせるには十分な証拠であり、何より自分で作れる可能性が出てきたのだ。

これが、興奮せずにいられるだろうか！？

否！断じて否！

が、しかし——、

「光彦。お前にあれを完成させるなんてことは、無理だ」

江戸川コナン——いや、工藤新一。

僕が『サーカスクラウン事件』のどさくさに紛れてアポトキシンの4869のデータを持ち去ったことを知っている人物は悲しそうにそう言っていた。

『あの話』——つまり、僕が彼の正体を知ったのは、ごく偶然だった。

『サーカスクラウン事件』が起こる前、僕はよく行く喫茶店で学校の宿題を一人でやっていた。

しばらくして、僕の後ろの席に、鈴木園子と毛利蘭が座ってきた。すぐに気付いたが、ずっと会っていなかったのもあって、どういうノリで挨拶していいかまごついている間に、二人は僕に気づかずに世間話を始めた。

僕は挨拶を諦めて、再び宿題を片付ける方へ意識を向けた。

一時間……いや、二時間か。

黄色い笑い声を織り交ぜつつ交わされていた世間話が途切れた。

宿題が一段落した僕は、背後に意識を集中した。

——と、

「——新一と、話をつけてきたわ」

毛利蘭のその後の告白に、僕は体を傾けて聞き入っていた。

結論からいえば、まあ、非現実的でありえない話であった。

が、実際話題の人物に面識のある僕は、全くありえないとは言いきれない自分がいることに気づいた。

江戸川コナンが工藤新一である事実——はこの際置いとくとして、僕の関心がいったのは彼の体が小さくなった原因である劇薬、アポトキシンの4869の存在。

そうして劇薬の存在を知った僕に神様がほぼ笑んでくれた。

それが『サーカスクラウン事件』なのだ。

僕は必ず、あの事件の時点に入れたデータを元にアポトキシン4869を完成させてみせる。

僕がこの薬が完成させた時が、どうあがいても追いつくことのできないコナン君や灰原さんを超えた証となるはずだから。

江戸川コナンと灰原哀の屋上での会話

「——江戸川君」

「ん……………ああ、灰原か」

「…らしくないわね」

「何が？」

「昼休みだって言うのに、大好きな球蹴りもしないで屋上で感慨ぶ

ってるなんて」

「……んー。別に」

「……。あの事件のこと、まだ気に病んでるの？」

「……」

「忘れるとは言わないけど、あんまり感傷的にならない方がいいと思うわ」

「……。なるなっの方が無理だろ」

「まあ……その、そう、だけど。でも、あの事件は貴方のせいじゃないんだから、間違っても自分を責めないで」

「……」

「……」

「……」

「……。江戸川君？」

「——ぷつ、あははっ」

「な、何よ？急に笑ったりして」

「お前、表情には出てないけど、俺のこと気遣いすぎ」

「な！？」

「何、そんなに俺のこと心配？」

「あ、貴方ねえ——」

「わりいわりい。何かさ、俺に対してそうやって必死に言ってくるのってそうそうないからちよっと新鮮でさ」

「……」

「大丈夫だつて。もう——あんなことはしないからさ」

「本当よ。衝動的とは言え、自殺なんて」

「自分の事は完全に棚上げしているな、その発言」

「……うるさいわね。心配して損したわ」

「そんなことねえよ。お前がそうやってそばに居てくれるから、俺は正気でいられるんだ……」

「——工藤君？」

「……。さて、昼休みもそろそろ終わるな。教室戻ろっぜ」

「……………」

「……………」

「……………。江戸川君」

「何だよ？」

「——正気でいられるのなら、いくらでもそばにいるから。だから貴方も私の前からいなくならないで」

「……ホント、自分の事は棚上げだな」

「……………」

「——そんな心配そうな顔しなくても、俺はお前のそばから離れる気はねえって！」

「……そう。……ありがと」

サーカスクラウン事件についての考察（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。

江戸川コナンと円谷光彦（前書き）

設定 中年時代。

江戸川コナンと円谷光彦

「——いやはや、本当にお久しぶりですねえ、コナン君。相変わらず、お元気そうで」

「そっちもな。思っていたより元気そうじゃないか」

「ええ、おかげさまで」

「アメリカからいつ帰って来たんだ？」

「先週の頭に」

「へえ、そうだったのか。だったらもうちょい早く言えよ、迎え行きそびれちまったじゃないか」

「言ったところで、君、ちょうど事件でしたでしょう」

「——あ。悪い悪い、そう言えばそうだったな。じゃあ、元太や歩美には会ったか？」

「ええ。久しぶりにあつたら二人ともお子さん連れてきていて、自慢するんですよ。『これがうちの子だー』って」

「二人とも、親馬鹿だからな」

「君もでしょう？——ま、いいんですけどね。実際かわいかったですし、お子さんたち」

「元太ん所の息子はホント奥さん似でよかったぜ」

「あはは。それは言えてましたね。性格も父親に似ず、随分と落ち着いてましたし」

「はははっ、違いない」

「知ってます？歩美さんの娘さんと元太君の息子さんの間で今探偵ごっこが流行っているそうですよ」

「…………。らしいな。ったく、根本的な所はしっかり親譲りだな」

黒ぶち眼鏡をかけ、黒のハイネックに黒のスラックス、極めつけ

は黒のロングコートと全身黒づくめの男——江戸川コナンと、髪型を真中分けにしたソバカス面に、白が基調のジャケットとスラックスの男——円谷光彦は、テーブルを挟んで向かい合った席で苦笑しあった。

冷え込み始めた十二月上旬。

深夜一時。乾いた寒風が容赦なく吹く中、米花町の廃れたファミリーストランの窓際の端に席を下ろしている黒と白の男二人は一通り笑い合ったあと、沈黙した。

「……………」

「……………」

先ほどのようなほのぼのとした世間話の雰囲気は一切消え、暖房が効いた店内はしかし、そこだけはぐつと温度が低くなっていた。

「お待たせしました。ご注文のホットコーヒーです」

しばらくして、来た時に頼んだコーヒーを、ややだらしない格好をした店員が運んできて、コーヒーカップとソーサーをコナンと光彦の前にそれぞれ置いた。

「ごゆっくりどうぞ」

営業スマイルすらない無愛想な言葉を最後に、店員は去っていた。

コナンも光彦も店員の問題ありな接客態度には特に触れず、コーヒーを飲み、

「……………」。まだ続けてんのか？」

コナンが重々しく光彦に問いかけた。

光彦は持っていたコーヒーカップをソーサーに戻すと、特に表情を変えずに言った。

「当たり前じゃないですか」

「…………当たり前か。いい加減諦めろよ。いつかも言っただろ？お前に

は――」

「――無理だつて？ そんなことはありませんよ」

「スポンサーがいるからつていい気になるな。あれは人間が手を出していい代物じゃない」

「君がそれを言いますか？ 説得力つてものがありませんよ」

光彦はコナンを小馬鹿にしたようにせせら笑った。

「説得力があるうがなかるうが関係ない。――あの薬にこれ以上関わるな」

光彦の態度にも特に動じず、コナンは淡々と言った。

「もう、遅いですよ。すでに試作品まで作ってしまっているんです。今更ですよ、今更」

「……………」

光彦の呆れ半分の声色に、コナンは一瞬悲しそうな目を向けたが、すぐに目を伏せるとコーヒ―を啜った。

「もうちょつと驚いたつていいじゃないですか」

コナンのたいして変化のない表情を見て、光彦は苦笑した。

こういうコナンの反応も想範囲内だったので、光彦は気にせず言葉紡ぐ。

「まあ――何にしても、サーカスクラウン事件に感謝ですね。あの事件がなければ、僕は『アポトキシン4869』なんて薬の存在さえ知らないままで過ごしていたでしょうから」

光彦の言葉に、コナンは眉をぴくりと動かしした。

サーカスクラウン事件――二十年前に起きた、毛利蘭による連続殺人バスジャック事件であり、この事件でコナンは多くの友人を失い、探偵としてのプライドや信念をいのように踏みにじられた。

しかもこの事件の真の首謀者は今現在も捕まっていはいない。

笑顔の死人達や、バスジャック時のパフォーマンスから、毛利蘭の劇場型復讐劇のように見えたこの事件。

だがしかし、毛利蘭の裏には操っていた奴が存在しており、その人物とバスジャック後に遭遇して取り逃しているコナンは、今もその

人物——『サーカスクラウン』を追い続けている。

光彦はその事件の時、真の首謀者と相対していたコナンと灰原哀がいるビルに、たまたま居合わせていた。

そして、光彦はアポトキシン4869のデータの一部を手に入れたのだ。

「あの事件のことは言うな」

正直、あの事件はコナンにとってトラウマ以外の何物でもない。

「すいません。失言でしたね。君には本当に辛い事件でしたものね」言葉とは裏腹に、どこか卑下たような視線を向けながら光彦は言った。

「あの事件の話をするつもりなら俺は帰るぜ」

コナンが怒気を込めながら言うのを、光彦は何でもないようにとつてつけたような笑顔を向けた。

「まあ、そうせっかちにならなくてもいいじゃないですか」

「せっかちにされなくなったら、今度はもっと常識的な時間に呼び出せよ」

「しょうがありませんよ。僕、これでも忙しいんですよ」

「あの薬関係で、だろ？やめれば常識的な時間に余裕できるぜ？」

「君の奥さんがもっと協力的なら、この忙しさもなくなるんですけどね」

「——あいつを巻き込んでみる。てめえを絶対地獄に叩き落としてやるからな」

「…………。幼馴染の蘭さんすら守れなかったくせによく言いますね」

光彦の逆なでするような発言に、コナンは目を細めた。

「…………。要件を言えよ。これ以上お前というっかり殺しちまいそうだ」

ひんやりとした怒気——もとい殺気を充満させながら言った。

「おー、怖い……。いやね。実は解毒剤がなくて困ってまして」

「解毒剤…………？」

コナンが眉を寄せると、光彦はくぐもった声で冷笑した。

「——ぶつちやけちゃうとですねえ、死に過ぎるんですよ、モルモットが。正直ここまで数がきちゃうと隠すのも面倒というか……だから死ぬ前に解毒剤を投与して生かそうと思ひまして。だが、まるで作成がうまくいかない。だから持つているであろう君たち夫妻に接触して、奪い——もとい、頂戴しようと」

「……………」

コナンの表情に陰しさが増していく。

「解毒剤は科学的に造ることは不可能——そういうことにされていくみたいですけど、本当はあるんですよ？君の奥さんは優秀だ。絶対に造り上げたはずなんです」

「——要するにこういうことか？今後薬の研究を続けるのにどうしても解毒剤が必要だから寄せ——ってことか？」

「はい、そうです。灰原さんを直接訪ねて強奪してもよかったですけど、君のことですから何かしら備えていると思ひまして。遠回りですけど、正攻法で行くことにしました」

「なるほどな。ということはお前、試したんだ？」

「ええ、試したんですよ、試作品を——」

光彦が三日月のように笑った。

「——殺す必要がない人間、ざっと百人ほどにね」

目の前で愉快そうに笑う幼馴染を見て、コナンは落胆したようにそつと嘆息した。

彼——光彦はもう戻ることのできないところまで来ている。

そんなことは、彼がアポトキシン4869の研究に没頭し始めたころからとうに分かっていたことなのだ。

絶対的なスポンサーを得、たった一人でこの研究を続け、ついに試作品にまでたどり着いてしまった光彦は、今や完全に暴走していた。

倫理観を忘れ、人間をモルモット扱いする今の彼は、どんな手段を講じてでも止めなければならぬ人物だが、コナンは最後までいつか分かってくれると信じていた。

——しかし。

彼は最後まで分かつてはくれなかった。

「——光彦。お前さ。考えたことはないか？」

なおも冷笑している光彦に、コナンはおもむろに問いかけた。

「何をだい？」

「お前と同じようにアポトキシン4869の研究——いや、アポトキシン4869を含む、最終目標が同じ連中のことをさ」

「——は？」

光彦は訝しげに聞き返した。

「幼児化や細胞の再生能力向上……。つまりは最終目的が不老不死に関する研究をする連中のことをお前は考えたことが——いや、聞いたことがあるか？」

「……何を言ってるんです？コナン君」

不審げに問う光彦を無視して、コナンはなおも続ける。

「お前と似た、或いは同じような研究をしている奴の話だ、光彦」

「……？……何を……」

「お前は気づいているはずだ、光彦。そう言った連中が成功しそうになると、『不慮の事故』

が起こっているということを。……言っている意味、分るよな？」

「——！！！」

うつむき加減に黒ぶち眼鏡をずり上げながら言うコナンの顔には、表情らしい表情は一切なく――。

「な、ななな何を言って、いるの、かあ、わか、わわかわかわ分らないですよ、こ、コナン君」

俯いていた顔をゆつくり上げたコナンの瞳を見て、何かを悟った光彦は、一気に血の気が引いたように真っ青になった。

「そ、そそそそんな馬鹿な！そんなはずはない！そんなはずはないんだ！君は！こ、こここの薬、の——生きた成功例なんだ！そそそ、それが寄りによって！『そっち』に付い、ているなん、て！」頭を掻きむしりながら激しく動揺する光彦を尻目に、コナンは嘆息しながら言った。

「その様子なら、どうやら知っているみたいだな。と言うかな。俺はお前の造っている薬の被害者なんだ。『こっち』につくに決まってんだろっが」

ゆつくりと立ち上がるコナンに釣られて、光彦もぎこちなく立ち上がると、警戒心を大いにふりまきながら、後ずさりした。

「ふざけるな！僕は、ぼぼぼ、僕は殺されないぞ！絶対！殺されないぞ！絶対、絶対！——『黒の組織』なんぞに、殺されてたまるかああ——！」

無表情でこちらを見ているコナンに絶叫を浴びせた光彦は、すぐ背後に人の気配を感じて、勢いよく振り返った。

「——またのご来店を」

振り返った先に立っていた男——だらしない格好をしたレストランの店員は、これ以上はないほどの営業スマイルを顔に貼りつかせ、スタンガンを容赦なく光彦に押しつけた。

深夜の静まり返ったファミリーストランから、黒いロングコートの男が二人、白基調のジャケットにスラックスを着ている、気を失った男を音もなく運び出していた。

そして、あらかじめ止めておいた黒塗りのワゴン車の後部座席のドアを開け、気を失った男——円谷光彦をその暗がりの中へと放り込んだ。

運んでいた男の一人はそのまま後部座席に乗り込み、残りの一人は運転席に乗り込むと、すぐに発進し、深夜の闇に消えていった。

『——皮肉よね。昔、あんなに必死になって潰した『黒の組織』を、今は私たちが名乗っているなんて』

ワゴン車が走り去った後、レストランから出てきた黒のロングコートを着た黒ぶち眼鏡の男の耳に、透き通るような静かな声が響いた。

「――哀」

黒のロングコートを着た黒ぶち眼鏡の男――江戸川コナンは、先ほど取り付けたインカムから聞こえた声の主の名前を呟いた。

『大丈夫？大分声が固いけど……。やっぱりつらかったんじゃないの？』

知り合った頃と違い、随分とこちらを気遣ってくれるようになった最愛の妻の声を聞いて、コナンは誰に向けるわけでもなくほほ笑むと、

「大丈夫だ。……それに昔漬した『黒の組織』と俺たちが保護されている今の『黒の組織』はまるで違うものだ」

『まあ、それはそうでしょうけど……。保護って言うより、私たち完全に戦力扱いされている気がするんだけど？』

インカムから聞こえる不満そうな声に、コナンは苦笑すると、
「今はしょうがないさ。何だかんだ言って結局狙われているのには変わりないんだからな」

『円谷君みたいに、命ではなく違う意味で、だけど』

「ははは。そうだな」

コナンは声をあげて笑うと、ワゴンが走り去った方向に目をやった。
「……………」

一瞬、悲痛に顔を歪めそうになったコナンは、なんとか無表情を取り繕ったが、周りに誰もいないことを思い出して、思わず息を吐きながら苦笑するのだった。

江戸川コナンと円谷光彦（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。

米花霊園

「志保」

「何よ、新一」

「久しぶりだよ。こうやって二人揃うのって」

「そうかしら？」

「うん。一年半ぶりじゃないかな？」

「……連続児童誘拐事件以来だったかしら？……ふふ。同じ町内に住んでいるのに一年半にも会ってないなんて奇妙な話よね」

「それはそうだけど、何で志保となると毎度毎度事件に巻き込まれるかな？」

「遺伝よ」

「遺伝か」

「そうよ。だから今回も陰惨な事件が起こるかもね」

「不吉なこと言わないでくれるかな。こっちは妻子持ちなんだ。巻き込まれるたびに命の危険にさらされるのはごめんだよ」

「そうよねえ。……あ、そうだね。妻子持ちで思い出した。これ、渡ししておくわ」

「何これ？」

「明美ちゃん、来週十二歳の誕生日でしょ？私からって言って渡しといて」

「何だよ。今年も誕生会来ないつもり？」

「忙しいの」

「あいつ、君が来るの楽しみにしてるのに……」

「ごめんなさい」

「……ま、仕事ならしょうがない……かな」

十二月上旬。

早朝の米花町を走るガラ空きのバスの中で、新一と呼ばれた男は、隣に座る志保と呼ばれた女から受け取った誕生日プレゼントを膝の上に置いた。

新一と志保は現在三十五歳。

新一は大学の教授であり、志保は探偵を営んでいる。

黒のスラックスに黒のセーター、その上から白衣を着て、黒縁眼鏡をしている新一と、タイトなスカートにブラウス。その上から紺の裾の長いコートを羽織っていて、赤がみかかった茶髪をしている志保。

この二人の組み合わせは異様に目立ってはいるが、現在乗っているバスはガラ空きのため、好奇の視線は浴びていない。

現在二人は、米花町の東にある米花霊園という小さな墓地に向かっている。

「……明美ちゃんももう小学六年生か。時間が経つのは早いわね」感慨に浸りながらそう呟いた志保に、新一は特に表情を変えず、横眼で見やりながら、

「まあね。……志保はさ、結婚とかはもう考えてないの？」と言った。

新一の問いに、志保は呆れたように顔を顰めた。

「何言ってるの？歳考えなさいよ。とうに適齢期は過ぎてるじゃない」

「そうは言ってもまだ三十五だろ。志保なら十分いけるんじゃないかな？」

「まだじゃないわ、もう三十五なの。それに私は人を好きにならないうって決めてるの」

「……それは初耳だね。何で？」

「前に好きになった男が事件の犯人だったの」

思わず閉口してしまった新一だったが、気を取り直して息を整え、と、再び口を開いた。

「まるで下手な二時間ドラマだね」

同情半分呆れ半分の新一の言い方にカチンときた志保は、

「黙りなさい。平々凡々と教授やってる新一にだけは言われたくないわ」

「人のあら探しをする探偵よりはましだと思うけど」

「へえ、言ってくれるじゃない。いつだったか爆弾魔につかまったとき、その探偵に命救ってもらったのはどこの誰だったかしら？」

「あんなの救ったうちに入るの？爆弾魔を言い当てただけで、結局爆弾の解体は僕がしたんじゃないか」

「黄色のコードを切れば助かるって分かったのは私が爆弾魔を言い当てて捕まえたからよ」

「——黄色のコード切った後で分かってても意味ないでしょ」

「……………」

「……………」

痛いところ突かれて押し黙る志保。

その志保を半目で見る新一。

そうして、二人は他愛もない言い合いをしながらバスで揺られていた。

2

車椅子の老婆は、脇に黒スーツを着たSPを従えながら、墓場の前で手を合わせた。

米花霊園の一番奥にある墓石——毛利家の墓。

その墓石の傍らにある霊碑には何人かの先祖の名前が続き、平成

に入っの最初の名前を、手を合わせ終わった老婆は哀愁のある眼差しで見つめた。

平成——四月——毛——蘭——二十三才。

何十年も前なので、ところどころ擦り減っているが、辛うじて読める部分に手を這わせ、老婆は「蘭……」と呟いた。

「園子様、お体に触ります。そろそろ戻りましょう」

右側にいたSPが、野太い声で車椅子の老婆——鈴木園子に厳かに告げた。

「そうですね」

園子は短く言うと、左側のSPが車椅子を押し始めた。

早朝の肌を刺すような冷気の中、霊園を出口の方へ向かっていると、正面に白衣を着た男と、紺の裾の長いコートを着た女が歩いていた。

園子は、その二人を見て体が強張ったが、二人はこちらには特に関心を示さず、側を通り過ぎた。

「ちよつと——あなた達——！」

思わず振り返り、呼び止めた園子は、二人が同時にこちらに振り返るのを見て、全身が硬直した。

その二人の姿が、一瞬にして何十年も前によく目にしていた光景とダブったのだ。

赤の蝶ネクタイ。黒縁眼鏡。小生意気な態度。

赤がみかかった茶髪。園子もしたことがあるボブカット。ツンと澄ました表情。

久方ぶりに思い出す、あの一連の日々。

園子は、ぶり返した嫌な記憶を振り払うように大きく頭を振った。「あの……何でしょうか？」

白衣の男が不思議そうに尋ねてくるのを、園子は一瞥して、

「ごめんなさい。何でもないわ」
とかすれた声で言った。

——もう……僕だけに……なってしまいましたね……コナン君、灰原さん。

白髪で長身の老人は、そばかす顔をしわくちやにして、悲痛に笑った。

米花霊園の中央にある、江戸川家の墓と掘られた墓石の前で、老人——円谷光彦は、ゆつくりと手を合わせた。

「僕は……たくさんの大好きな人たちが先に逝ってしまふのを、いつまで見続けられいいんですか？コナン君」

四十八年前の、サーカスクラウン事件で命を落とした蘭さん、服部さん、怪盗キッドこと黒羽さん、白鳥元刑事——。

「あのときは園子さんが蘭さんを半ば見殺しにしたお二人を絶対に許さないって、半狂乱になってましたよね……真実が分かった今でも許してはいないみたいですけど。ねえ、灰原さん」

自らの寿命を全うして死んでいった、小五郎のおじさん、妃さん、目暮警部、高木夫婦、歩美ちゃん、元太くん……。

そして、コナン君、灰原さん。

光彦をおいて、先に逝ってしまった大切な人たち。

「あんなものに手を出した、罰があたったのかもしれないね……」
光彦は重々しく独語していた。

——と。

「……円谷さん？」

出し抜けに声がして振り返ると、そこには白衣を着た男と、紺の裾の長いコートを着た女が立っていた。

江戸川コナンと灰原哀の間にできた双子である、江戸川新一と江戸川志保であった。

「やあ、新一君、志保君」

「おはようございます」

「どうも」

光彦が挨拶すると、礼儀正しく返す新一の挨拶と、愛想の足りない志保の挨拶が返ってきた。

——この子たちは、本当にお二人にそっくりですよ。

墓石の前で手を合わせる新一と志保を見ながら、光彦は目を細めた。

3

「今日の墓参りは何か変だったね」

「そうね」

「行く途中であつた、あの金持ちそうなお婆さんとか。何かこつちを知つてゐる風だったし」

「私の探偵の勘からして、多分お父さんやお母さんと何か因縁があると見たわ。私達を通して違うもの見てた感じだったし」

「そうかな？ 僕はむしろ見たくないものを見てしまった——的な表情してたと思うけど」

「そうかしら？」

「うん……何となくだけど」

「そう。……ま、どうでもいいけど……むしろ気になったのは円谷さんよ」

「十年ぶり、だっけ？」

「新一はね。私は三年ぶりよ」

「へえ、三年前に？」

「仕事がらみでね。三年前と全然変わっていなかったわ」

「あー。風の噂で聞いたことあるよ。円谷さんがやばい研究してて、命狙われたとか何とか」

「そうなのよ。その研究のために今まで渡米してて、三年前に帰ってきたって」

「で？仕事って何頼まれたの？」

「知らないわ」

「は？」

「円谷さんに君を呼んだのは助手の手違いだって言われたのよ。だから仕事も何も、すぐに追い返されちゃって——あのときはホント憤慨したわ。一言文句でも言ってやろうかと思ったけど円谷さん、私を追い出した後、私を呼んだ助手をこっ酷く怒ってて。彼女をこの件に巻き込むことは絶対に許されないとかなんとか、何かそういうの聞いてたらこれ以上関わるのは——ってまったく関わってはいなかったけど——やめといった方がいって思ったの。だから知らない」

「何か相当訳有りっぽいね」

「みたいよ。やばい研究つても案外デマじゃないのかもしれない

……けど、ねえ」

「…その口ぶりだと知ってるね？円谷さんのやばい研究」

「ん、まあ、一応……噂レベルだけど」

「どんな？」

「——不老不死の研究、だそうよ」

墓参りが終わり、帰りのバスの中で並んで揺られている新一と志保。

時刻はそろそろ九時を回ろうとしていた。

「不老不死？…カルト系かい？」

嫌な顔をして新一が腕を組んだ。

「うつん、ちゃんとした科学に基づいての研究らしいわ。何でも細胞の自己破壊プログラムを使った応用とか言ってたわね」

「うわー、嘘臭いな。だいたい、もしそういう研究してる人ならあんな風にのんびり墓参りなんて来れないでしょ。あり得ないよ」

志保は「そう……そうよね」と言って押し黙った。

そうして、暫く沈黙を保っていたが、新一は大学から電話がかかり、そのまま長々と話しこみ始めた。

そして志保も、バックからスケジュール帳を取り出して、今後の仕事の予定を組み立て始めた。

墓参りで、両親たちの因縁に微かに触れた二人であったが、あまりに怪しく、非現実的な空気の流れる世界であるが故に、新一と志保は無意識にそれらを遠ざけようと、現実を目を逸らした。

こちらを見つめる謎の老婆……。不老不死の研究しているのではないかと噂される両親の幼馴染。

あり得ない……か。

志保はスケジュール帳を閉じると、未だ揺れるバスの中、窓から外に視線を向けた。

雲一つない晴れた空の下、いつもの平和な米花町が見え、志保はいつもの日常に帰ってきた感覚を感じて、大きく溜息をついた――。

米花霊園（後書き）

一応、コナンの短編はこれで完結となります。
最後まで読んでくださって本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6708j/>

名探偵コナン 短編集

2010年11月16日11時24分発行